八尾市文化財調査報告46
平成13年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書I

2002年3月

八尾市教育委員会

八尾市文化財調査報告46　正誤表

頁・行	正	誤
20頁　19行	川西編年Ⅴ期	川西編年・期
38頁　２行	4層からは	1区の4層からは
38頁　５行	4は丸みのある	4の丸みのある

八尾市文化財調査報告46
平成13年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書I

2002年3月

八尾市教育委員会

はじめに

八尾市は、大阪府のほぼ中央部に位置し、生駒山地西麓から大阪平野の東部にかけての範囲に市域を有しております。古くは、河内湖、河内潟に面し、旧大和川をはじめとする多くの河川によって、肥沃な平野が形成されてきました。ここには旧石器時代から連綿と遺跡が形成されており、全国的にも有数な遺跡の宝庫と呼べる地域であります。

本書には、当教育委員会が平成13年度に市内の個人住宅建設、民間の各種事業の工事等に伴って実施した遺構確認調査の成果を収めております。

今後、市内の貴重な埋蔵文化財が、市民の方々をはじめ、多くの人々に親しまれるよう、保存・活用されていくことが、重要な課題となるでしょう。本書が、その役割の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査に際し、深いご理解とご協力を賜りました関係各位に感謝いたします。

平成14年３月

八尾市教育委員会

教育長　森　　卓

例　　言

1．本書は、八尾市教育委員会が平成13年度に国庫補助事業（市内遺跡発掘調査）として、八尾市内で実施した遺構確認調査の報告書である。

2．調査にあたっては、八尾市教育委員会　生涯学習部文化財課　米田敏幸、吉田野乃、吉田珠己、藤井淳弘、西村公助が担当した。

3．本書には、巻末に掲載した調査一覧表のうちで、特に成果のあった調査の概要・報告を収録した。

4．本書の作成にあたっては、各調査担当者が執筆を行い、文責はそれぞれ各報告の文末に記した。本書の編集及び巻末の調査一覧表・抄録の作成は藤井が行った。

第1図　八尾市の位置

本 文 目 次

1．跡部遺跡（2000－435）の調査 …… 1
2．恩智遺跡（2000－398）の調査 …… 4
3．久宝寺遺跡（2001－271）の調査 …… 6
4．久宝寺寺内町遺跡（2001－193）の調査 …… 8
5．郡川東塚古墳（2000－306）の調査 ……11
6．神宮寺遺跡（2001－64）の調査……28
7．東郷遺跡（2001－275）の調査 ……31
8．東弓削遺跡（2001－30）の調査……33
9．水越遺跡（2001－97）の調査……36

調査一覧表（平成12年度2月～3月、平成13年度4月～1月）……39

写真図版目次

図版１　跡部遺跡（2000－435）の調査

図版２　久宝寺寺内町遺跡（2001-193）の調査

図版３　郡川東塚古墳（2000-306）の調査①

図版４　郡川東塚古墳（2000-306）の調査②

図版５　郡川東塚古墳（2000-306）の調査③

図版６　郡川東塚古墳（2000-306）の調査④

図版７　郡川東塚古墳（2000-306）の調査⑤

図版８　郡川東塚古墳（2000-306）の調査⑥

図版９　郡川東塚古墳（2000-306）の調査⑦

図版10　郡川東塚古墳（2000-306）の調査⑧

図版11　神宮寺遺跡（2001-64）の調査

図版12　東弓削遺跡（2001-30）の調査

図版13　水越遺跡（2001-97）の調査

図版14　恩智遺跡（2000-398）・久宝寺遺跡（2001-271）出土遺物

図版15　久宝寺寺内町遺跡（2001-193）出土遺物

図版16　郡川東塚古墳（2000-306）出土遺物①

図版17　郡川東塚古墳（2000-306）出土遺物②

図版18　郡川東塚古墳（2000-306）出土遺物③

図版19　神宮寺遺跡（2001-64）・東弓削遺跡（2001-30）
水越遺跡（2001-97）出土遺物

1．跡部遺跡（２０００－４３５）の調査

１．調査地：八尾市春日町３丁目19・20（一部）

２．調査期間：平成13年３月15日

３．調査方法

分譲住宅建設に伴い試掘調査を行った。人孔部分に２×３ｍの調査区を３箇所（合計面積18㎡）設定した。調査地の名称は、南側から１区～３区と名付け、各調査区とも機械と人力を併用して調査を行った。

４．調査概要

１区

地層

１層　盛土　層厚0.6ｍ。　現地表面T.P.+9.2ｍ。

２層　淡灰色粘砂　層厚0.2ｍ。

３層　緑灰色細砂　層厚0.15ｍ。

４層　緑灰白色粘土　層厚0.1ｍ。

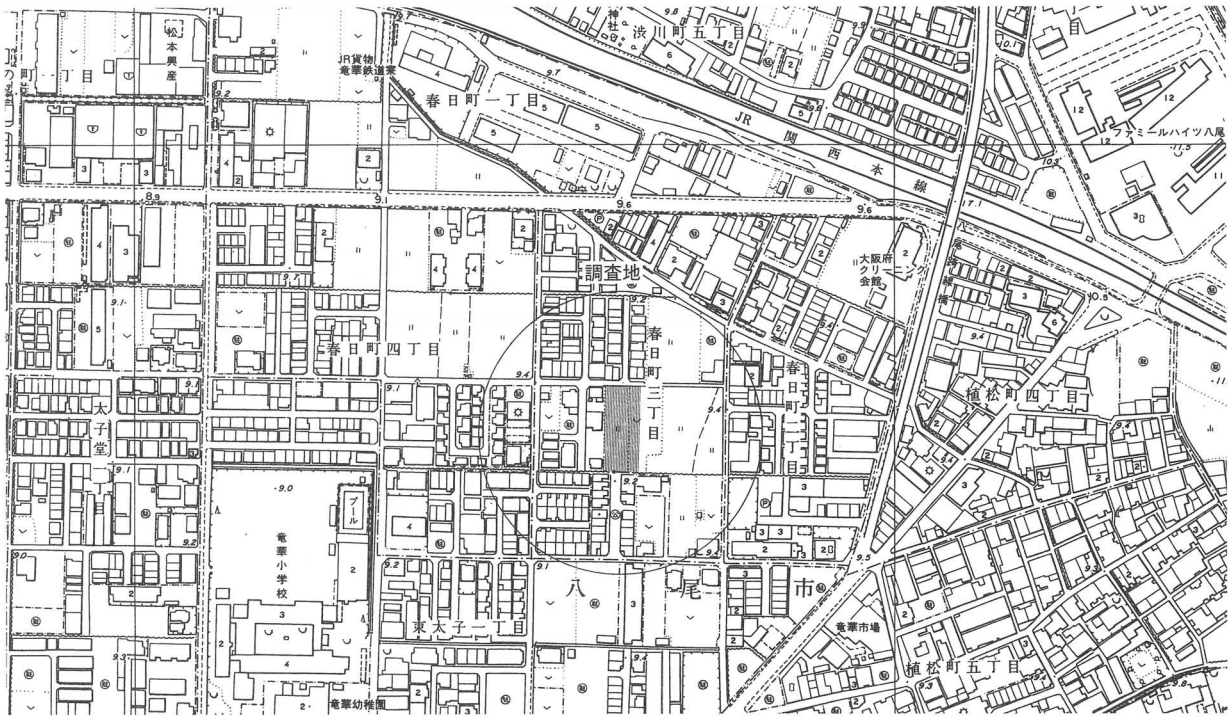
５層　茶灰白色粘砂　層厚0.15ｍ。

６－１層　暗灰紫色粘土　層厚0.2ｍ。

６－２層　暗灰紫色粘土（砂礫多く含む）　層厚0.1ｍ以上。

検出遺構

盛土を機械で掘削し、以下機械と人力の併用により調査を行った。結果、６－１層からは弥生時代中期の土器の破片や古墳時代の土師器・須恵器の破片が少量出土した。また、６－２層内からは弥生時代中期の土器およびサヌカイトの剥片、古墳時代の土師器・須恵器の破片が少量出土した。しかし、遺構の検出はなかった。



第２図　調査地周辺図（１／5000）

2区

地層

1層　盛土　層厚約0.7m。　現地表面T.P.+9.2m。

2層　黒色細砂混粘土（旧耕作土）。　層厚,約0.1m。

3層　緑灰色細砂　層厚約0.15m。

4層　緑灰白色粘土　層厚約0.1m。

5-1層　茶灰白色粘砂　層厚約0.25m。

5-2層　灰白色粘砂　層厚約0.1m。

6-1層　茶灰白色粘土　層厚約0.1m。

6-2層　茶灰白色粘土（砂多く含む）層厚約0.15m。

7層　灰色粘土　層厚約0.1m以上。

検出遺構

盛土を機械で掘削し、以下機械と人力の併用により調査を行った。その結果、5-1層と6-1層内からは古墳時代後期頃の土師器・須恵器の破片が少量出土した。

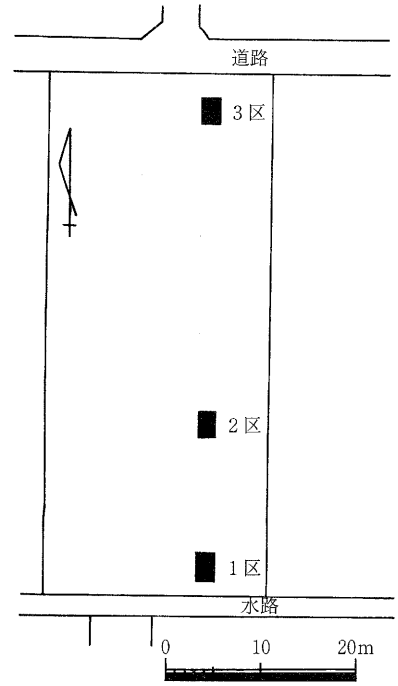
3区

地層

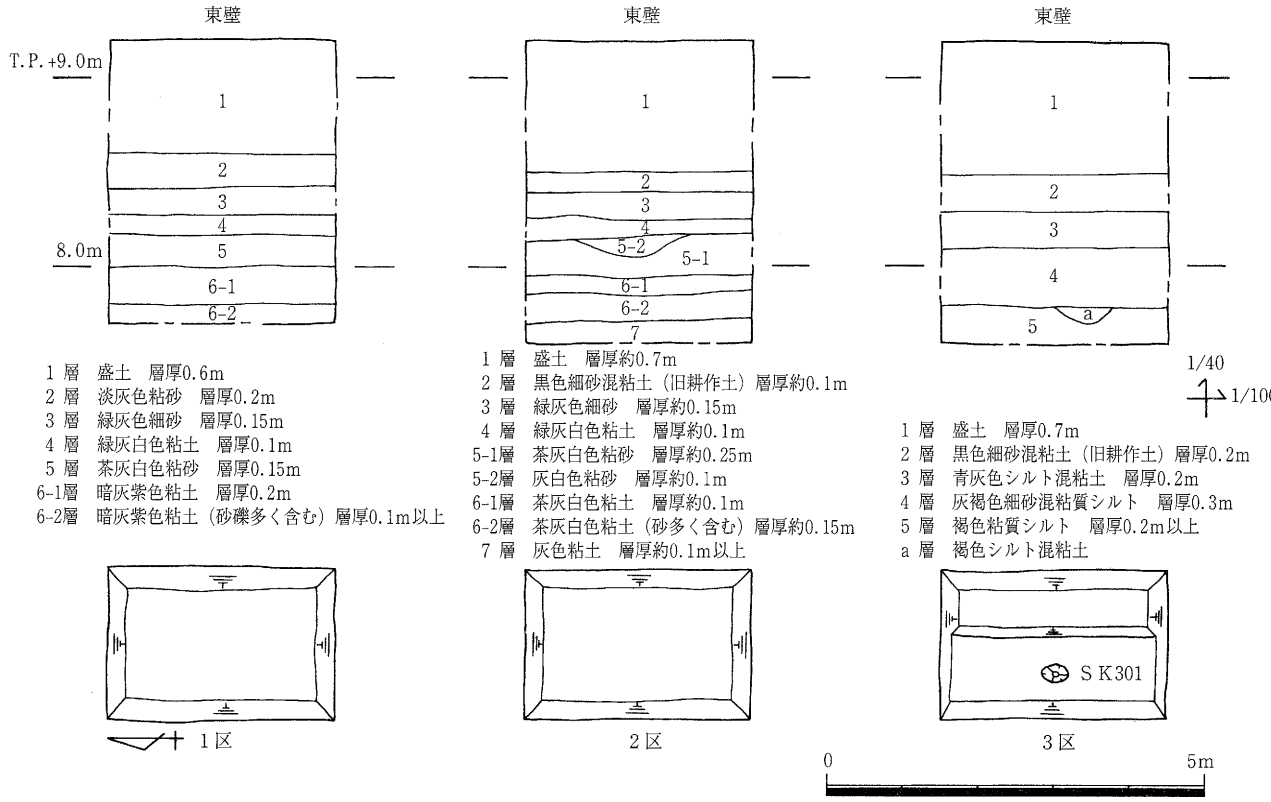
1層　盛土　層厚0.7m。現地表面T.P.+9.2m。

2層　黒色細砂混粘土（旧耕作土）　層厚0.2m。

3層　青灰色シルト混粘土　層厚0.2m。



第3図　調査区設定図（1／800）



第4図　1区～3区平断面図（平面図S＝1／100・断面図縦1／40　横1／100）

４層　灰褐色細砂混粘質シルト　層厚0.3m。

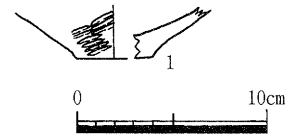
５層　褐色粘質シルト　層厚0.2m以上。

検出遺構

盛土を機械で掘削し、以下機械と人力の併用により調査を行った。その結果、第５層上面で土坑１基（ＳＫ301）を検出した。ＳＫ301は平面形状が楕円形で、長径0.35m、短径0.25m、断面形状は皿状で、深さ0.1mを測る。埋土は褐色シルト混粘土で、内部からは弥生土器、土師器、須恵器の破片が数点出土した。

５．出土遺物

３区のＳＫ301からは１が出土した。１は弥生時代後期の甕の底部で、底部径4.0cmを測る。外面は体部から底部に至るまでタタキを施す。外面全体には煤が若干付着している。



第５図　出土遺物実測図
（Ｓ＝１／４）

６．まとめ

今回の調査では、調査区の全体を通して弥生時代中期頃から古墳時代後期頃の遺物を含む層を確認し、３区では遺構を検出した。

今回の調査地の近隣では、（財）八尾市文化財調査研究会が北西約50m地点で下水道工事に伴い発掘調査を行っており、弥生時代前期の遺構が検出され、また前期から中期の遺物包含層も確認している（坪田真一1999）。このことから、今回の調査では弥生時代中期の遺物を含んでいる地層を確認したので、上記調査例を含む以前から行われている調査例と合わせ考えると、今回の調査地周辺には弥生時代前期～古墳時代後期頃の集落が存在していることが推測できる。

（西村公助）

【参考文献】

1988『八尾市史』（前近代）本文編　八尾市役所

安井良三　1991『跡部遺跡発掘調査報告書』（財）八尾市文化財調査研究会報告31　（財）八尾市文化財調査研究会

成海佳子　1997「Ⅱ　跡部遺跡第11次調査」『（財）八尾市文化財調査研究会報告58』（財）八尾市文化財調査研究会

坪田真一　1999「Ⅰ　跡部遺跡第25次調査」『（財）八尾市文化財調査研究会報告62』（財）八尾市文化財調査研究会

坪田真一　1999「Ⅲ　跡部遺跡第27次調査」『（財）八尾市文化財調査研究会報告62』（財）八尾市文化財調査研究会

2．恩智遺跡（2000－398）の調査

1．調査地：八尾市恩智中町３丁目146番

2．調査期間：平成13年１月19日

3．調査方法

専用住宅の建設に先立ち、浄化槽設置個所に１×２ｍの調査区を設定し、地表下1.6ｍまで人力で掘削し、調査を行った。

4．調査概要

地表下0.5～0.9ｍで整地層と考えられる包含層（第８図３・４層）があり、それぞれ古墳～弥生時代後期（第９図１～３）および弥生時代後期（同４～10）の遺物が含まれる。またこの包含層直下の地表下0.9ｍでピットを検出した。この面は遺構面になると考えられるが、ピット内埋土に含まれる遺物は細片で時期は特定できなかった。この遺構面のベースとなる層（第８図６層）からは弥生時代中期の壷の口縁部（第９図11）やサヌカイトの剥片が出土している。以下の粗砂層では、図化できなかったが弥生時代前期の壷の口縁部や甕の破片などの遺物が見られる。

5．まとめ

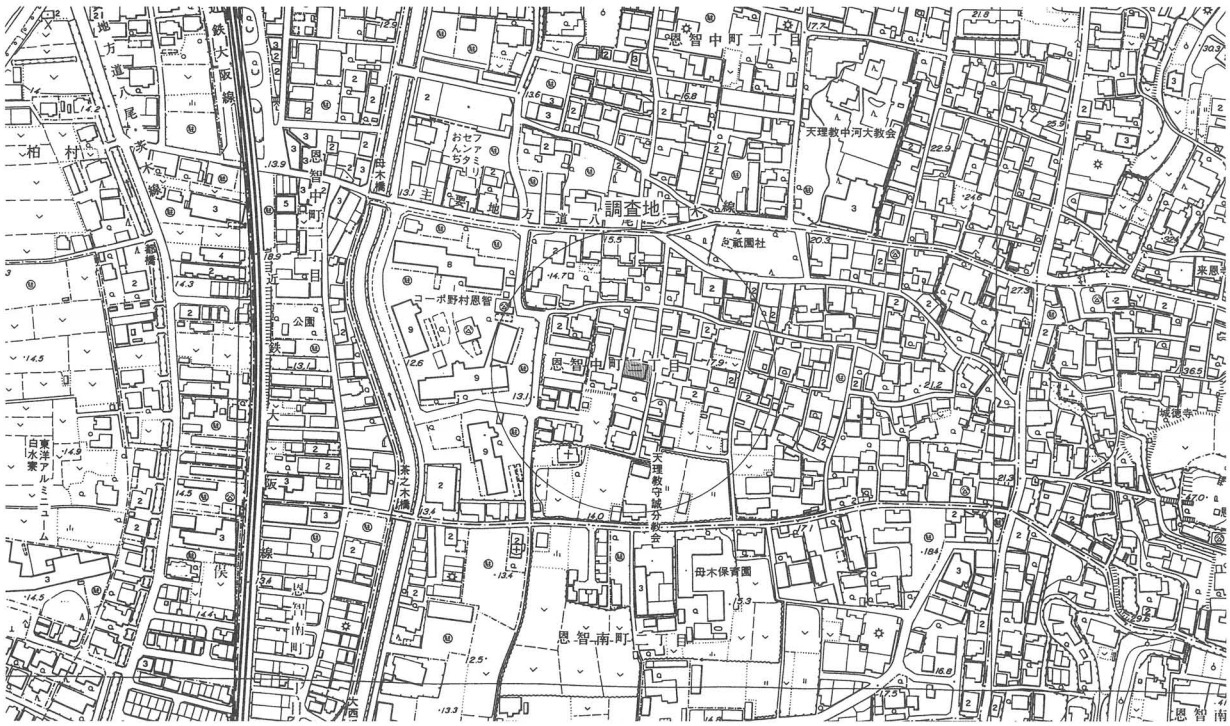
今回の調査地点の北北東約80ｍの「天王の森」（大阪府指定史跡）周辺では、縄文時代晩期の遺構・遺物が確認されており、以降連綿として集落が営まれていたことがわかっている。特に弥生時代中期には大規模な集落が恩智中町２・３丁目一体に形成されていたと考えられ、今回の調査でも弥生時代前期～古墳時代の遺物をそれぞれ含む層が確認できた。調査面積が狭小であったため明瞭な遺構は検出できなかったが、この地点が集落域の只中であったといえるであろう。

（吉田珠己）

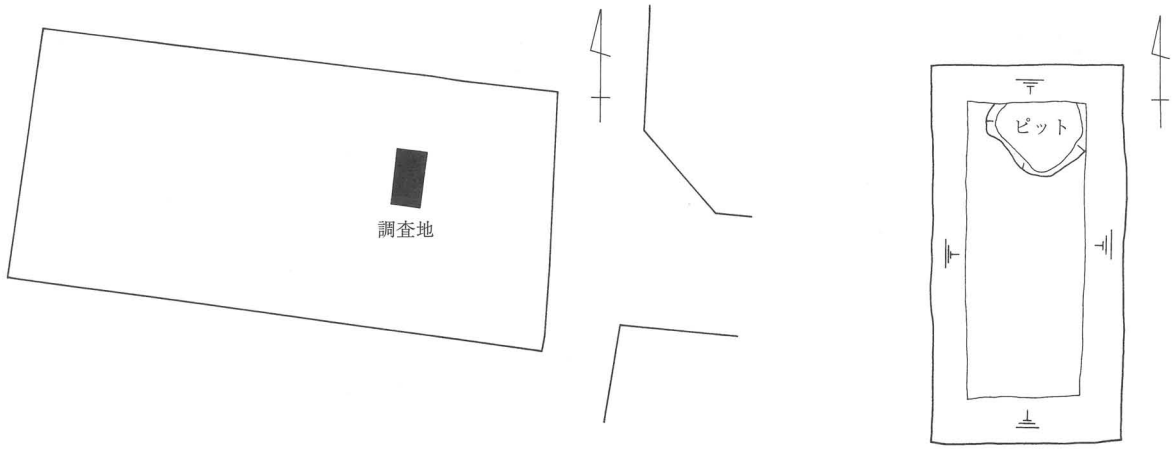
【参考文献】

八尾市教育委員会『八尾市内遺跡平成９年度発掘調査報告書Ⅰ』１９９８年

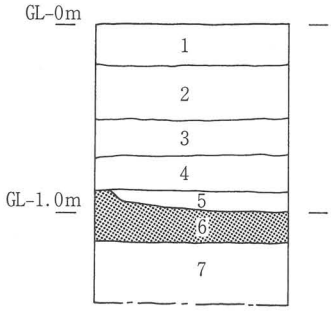
八尾市教育委員会『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ』１９９９年



第６図　調査地周辺図（１／5000）

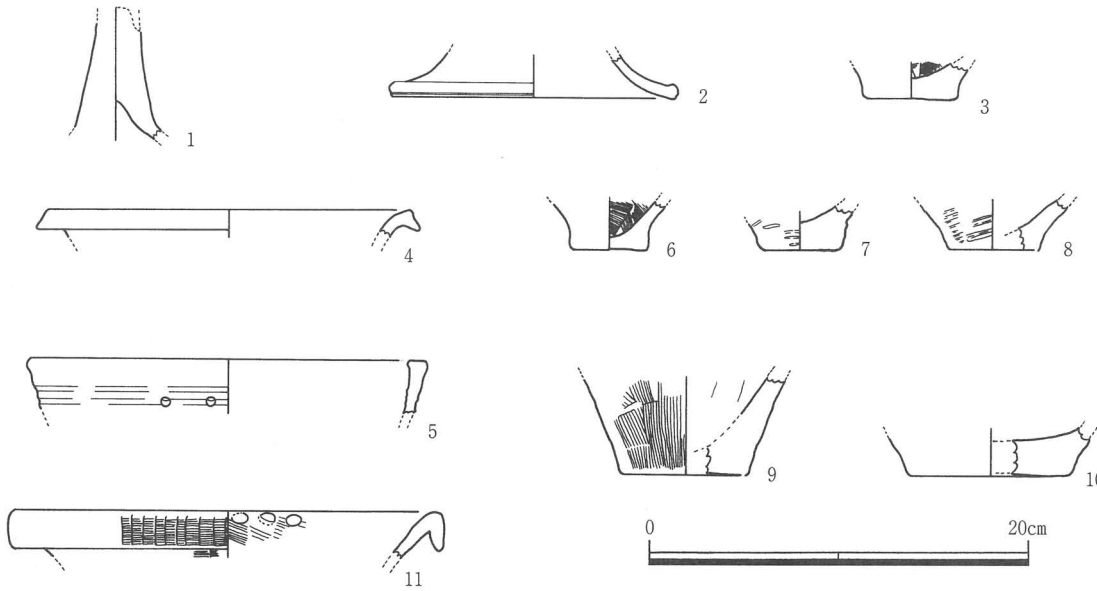


第７図　調査区位置図（Ｓ＝１／300）・遺構平面図（Ｓ＝１／40）



1　盛土
2　茶灰色砂混粘質土
3　暗茶灰色砂混粘質土
4　淡茶褐色砂礫混粘質土
5　暗褐色砂礫混粘質土（ピット埋土）
6　暗茶褐色砂礫混粘質土（弥生～古墳時代包含層）
7　茶褐色礫混粗砂

第８図　土層断面図（Ｓ＝１／40）



第９図　出土遺物実測図（Ｓ＝１／4）

3．久宝寺遺跡（２００１－２７１）の調査

１．調査地：八尾市久宝寺６丁目33・34・35・36

２．調査期間：平成13年10月19日

３．調査方法

倉庫の建設に先立ち、建物部分に３×３ｍの調査区を３か所設定（第11図参照）し、それぞれ地表下3.0 m付近まで、重機と人力を併用して調査を行った。

４．調査概要

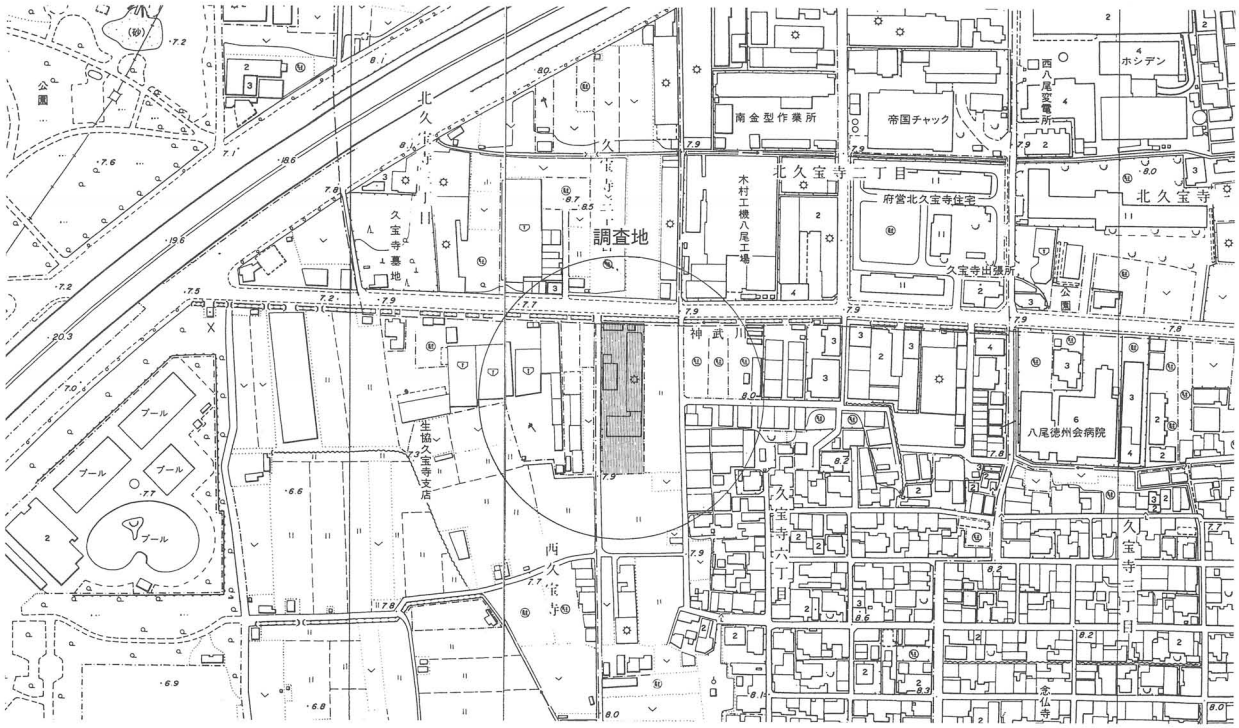
No. 1 調査区－　1.0mの盛土以下微砂シルト層（第12図第１調査区２～４層）が地表下1.4mまで見られ、地表下1.4～1.7mでは耕作土と思われる灰色微砂層となる。これより下は水分を多く含む微砂～細砂～中粒砂層が地表下2.8mまで続き、地表下2.6mの細砂～中粒層では植物遺体が多く含まれ、土師器（布留式期）の破片がわずかながら見られた。遺構は確認できなかった。

No. 2 調査区－　地表下1.8mまでは、第１調査区と同様の状況であったが、地表下1.8～2.2mの間で暗褐色小礫混シルト層（第12図第２調査区６層）がみられた。遺構となるかは不明であるが、水分を多く含む土質で落ち込みか溝の埋土の可能性がある。この層からは土師器の小型器台・高杯脚部･甕・壷などの他弥生土器（第12図１～６）も出土しており、弥生～古墳時代の包含層もしくは溝の埋土と考えられる。以下地表下2.6mまでは植物遺体を多く含む微砂層で、下層は旧河川跡かと思われる粗砂層（同８層）となる。

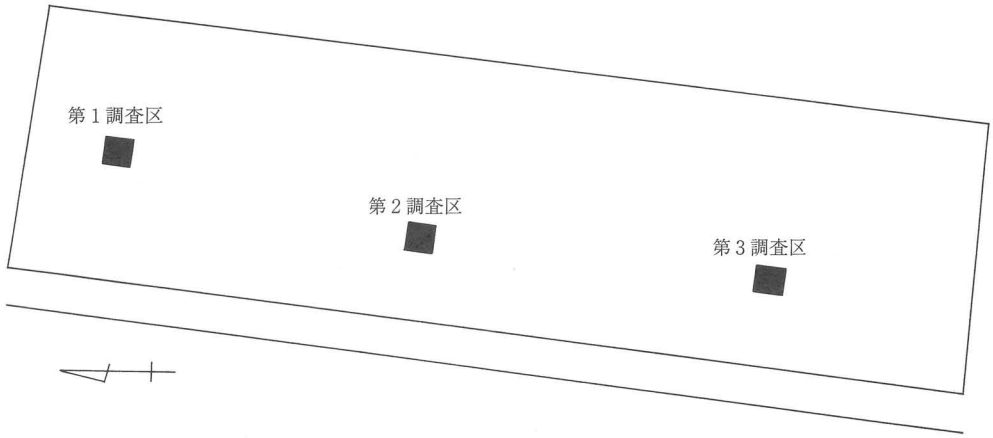
No. 3 調査区－　盛土直下の地表下0.6～1.2mの間で河川堆積層と考えられる粗砂層がみられ、以下地表下1.7mまで微砂シルト層（第12図第３調査区３～５層）となる。５層には中世の土師器片が含まれていた。地表下1.7～2.1mは細砂～中粒砂層（同６・７層）、地表下2.1～2.5mでシルト層となる。地表下2.5m以下の暗黒褐色粘土層（同９層）では、壷底部・甕口縁部などが出土し弥生時代の包含層となる。

近辺の調査においても、弥生～古墳時代の包含層が地表下2.0m前後で見られることから、この時期の遺構面が広がっていると考えられる。

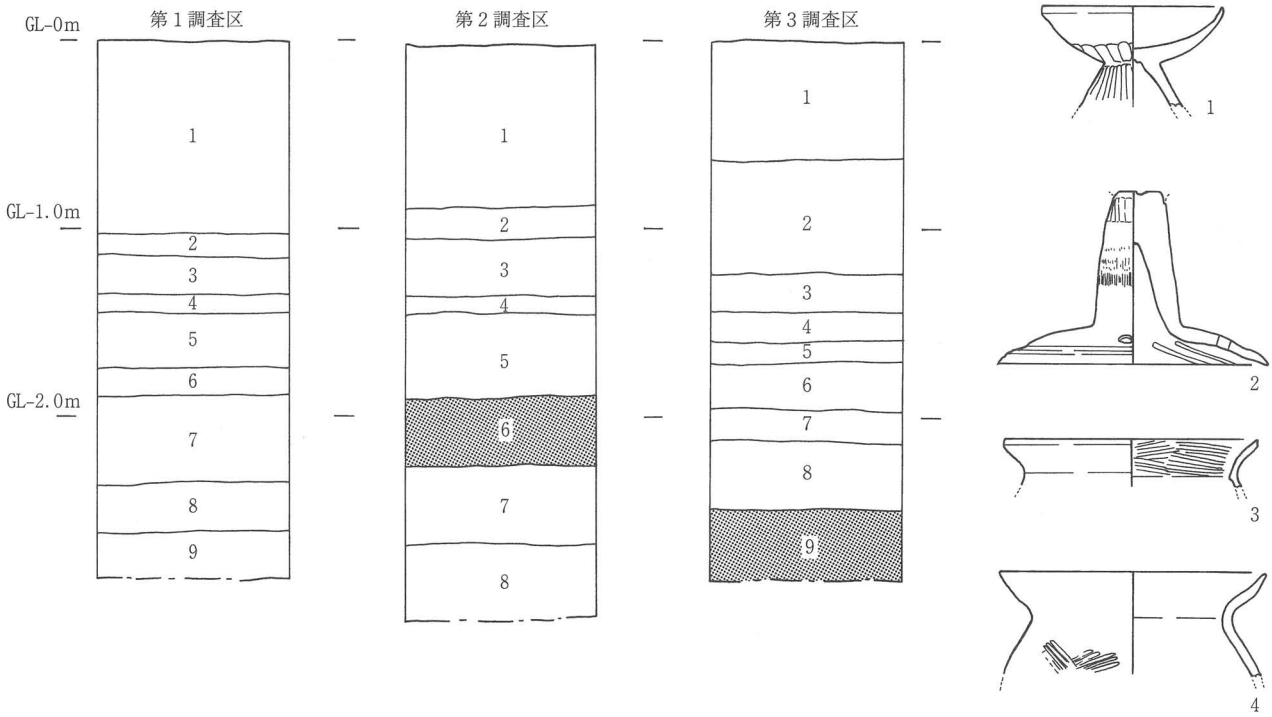
（吉田珠己）



第10図　調査地周辺図（１／5000）



第11図　調査区位置図（Ｓ＝１／800）



第１調査区

1　盛土
2　暗灰色微砂シルト混粘質土
3　灰色微砂シルト
4　暗灰黄色シルト
5　灰色微砂（耕作土）
6　淡灰色細砂
7　灰色微砂
8　灰色細砂～中粒砂
9　暗灰色細砂～中粒砂（植物遺体を含む）

第２調査区

1　盛土
2　暗灰色微砂シルト混粘質土
3　灰色微砂シルト
4　暗灰黄色シルト
5　灰色微砂（耕作土）
6　暗褐色小礫混シルト（弥生～古墳時代包含層）
7　暗灰色微砂（植物遺体含む）
8　暗灰色粗砂

第３調査区

1　盛土
2　茶褐色粗砂
3　暗灰褐色粗砂混シルト
4　暗灰色微砂シルト
5　淡灰色砂混微砂シルト
6　暗灰色細砂～中粒砂
7　黄褐色中粒砂
8　淡黒褐色シルト
9　暗黒褐色粘土（弥生時代包含層）

第12図　土層断面図（Ｓ＝１／40）・出土遺物実測図（Ｓ＝１／4）

4．久宝寺寺内町遺跡（２００１－１９３）の調査

１．調査地：八尾市久宝寺３丁目255番

２．調査期間：平成13年11月20日

３．調査方法

車庫付倉庫建設に先立ち、敷地内に１箇所の調査区（１×１ｍ　面積１㎡）を設定し、現地表下約1.5m前後まで人力により調査を行った。

４．調査概要

層序

1　10YR3/2黒褐色礫混粘土　層厚0.4m。盛土。上面の標高はT.P.+8.9m。

2　2.5Y4/2暗灰黄色礫混粘土　粘土塊をブロック状に含む　層厚0.7m。近世の遺物含む。

3　2.5Y4/1黄灰色礫混粘土　粘土塊をブロック状に含む　層厚0.3m。近世の遺物含む。

4　10YR4/2灰黄褐色細砂混粘土　層厚0.4m以上。

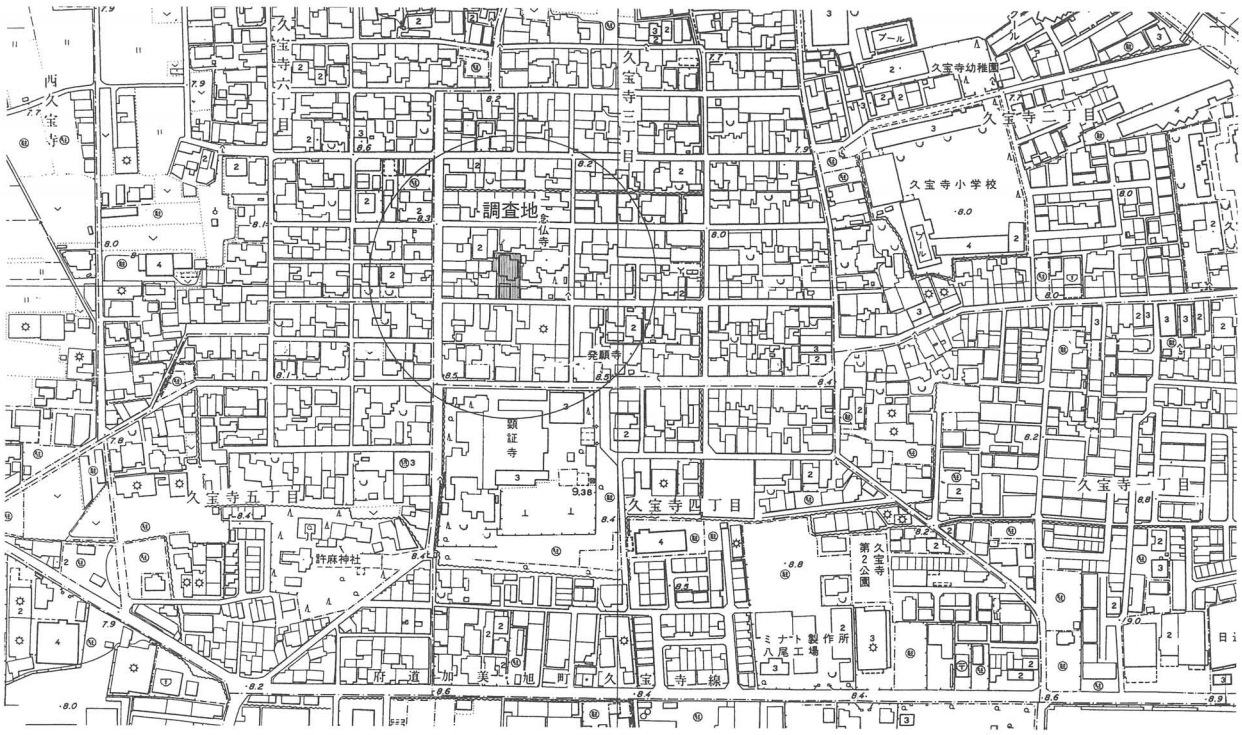
5　10YR4/1褐灰色細砂混粘土　層厚0.25～0.3m。

6　N2/0黒色粘土（炭多く含む）　層厚0.02～0.04m。

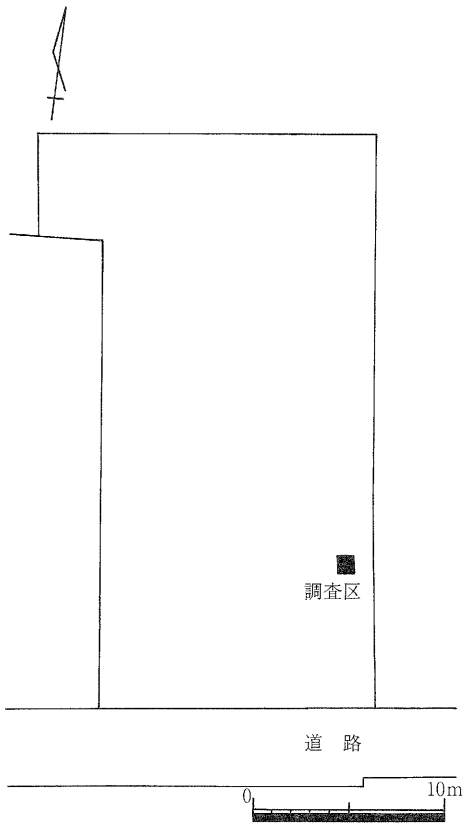
7　5B5/1暗青灰色シルト混粘土　層厚0.1m以上。室町時代～江戸時代の遺物含む。

検出遺構

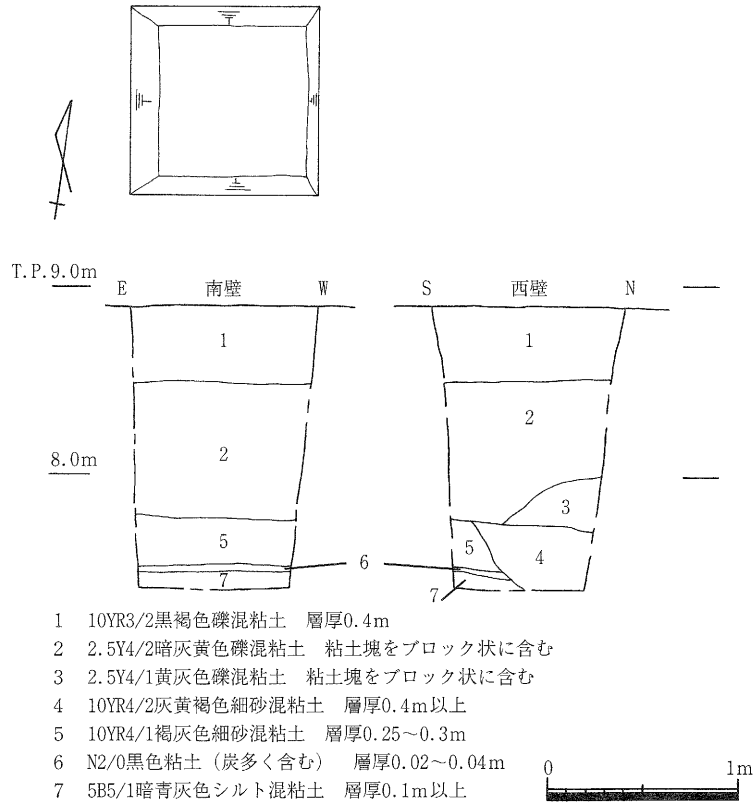
２層や３層内からは近世の遺物が出土し、また７層内からは瓦質の鉢や瓦が出土した。しかし遺構の検出はなかった。



第13図　調査地周辺図（１／5000）



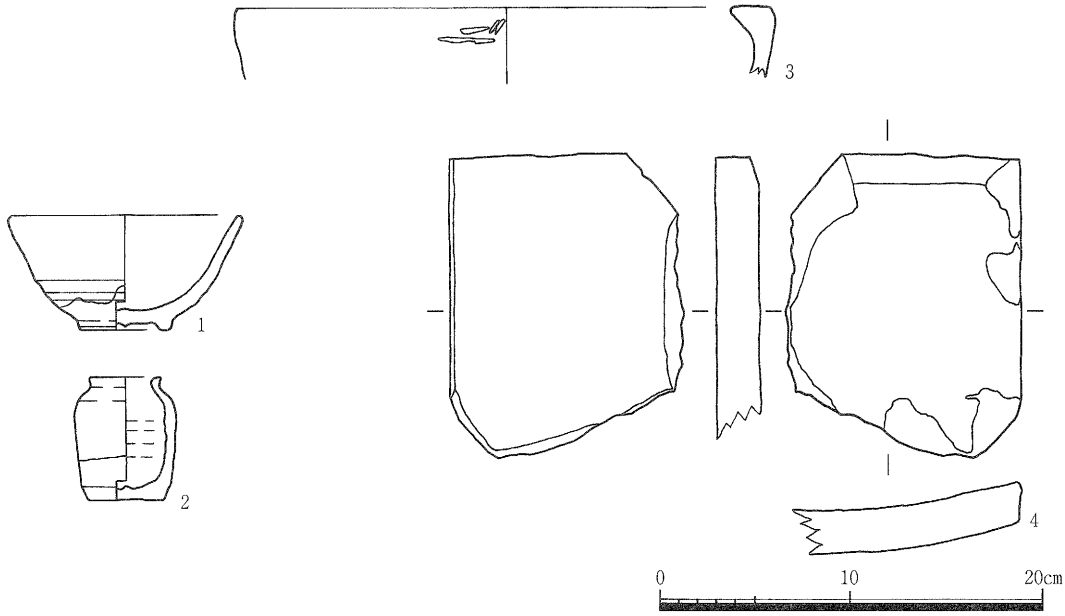
第14図　調査区設定図（S＝1／400）



第15図　平断面図（S＝1／40）

5．出土遺物

3層からは近世の陶器椀1、壺2が、7層からは鉢3、瓦4が出土した。1は口径12.0cm、器高6.0cmを測る。高台部を除くほぼ全面に釉を塗っており、釉部分の色は10GY5/1緑灰色で、高台部外面は5YR4/6赤褐色である。17世紀初めの唐津焼である。2は口径3.6cm、器高6.5cmを測る。底部外面を除くほぼ全面に釉を塗っており、釉薬部分の色は7.5YR3/4暗褐色で、底部外面は7.5YR6/8橙色である。江戸



第16図　出土遺物実測図（S＝1／4）

時代末期頃のものと思われる。3は瓦質の鉢と思われ、口径28.0cmを測る。口縁部はミガキのちナデている。室町時代～江戸時代頃のものである。4は凹面凸面ともにナデている。

6．まとめ

今回の調査では、2層と3層内には近世、7層内には室町時代から江戸時代初め頃の遺物が含まれていることを確認したが、遺構の検出はなく、実態は明らかにできなかった。しかし、これらの遺物包含層を確認したことから、室町時代以降、現在まで集落が存在してることが明らかになった。

謝辞

調査および整理にあたっては財団法人八尾市文化財調査研究会の方々からご教示いただいた。記して感謝いたします。

（西村公助）

【参考文献】

岡田清一　1999「11．久宝寺寺内町遺跡第1次調査（ＫＨＣ98－1)」『平成10年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会

岡田清一　2001「久宝寺寺内町を掘る」平成13年度特別展『久宝寺寺内町と戦国社会』図録　八尾市立歴史民俗資料館

5．郡川東塚古墳（２０００－３０６）の調査

１．調査地：郡川３丁目55番

２．調査期間：平成12年11月７日～11月22日（墳丘測量）

平成13年２月20日～３月26日・４月４日～６月７日・11月５日～12月４日

３．古墳の概要

郡川東塚古墳は、郡川３丁目に位置する古墳時代後期の前方後円墳である。現況の道路に面する北側が前方部側で、南側が後円部であったと考えられる。墳丘規模等の詳細・周濠の存在は不明である。東高野街道を隔てた西側には、郡川東塚古墳に先行して造営された前方後円墳の郡川西塚古墳がある。同じく後円部を南側にして造営され、円筒埴輪を使用し、初期横穴式石室を主体部にもつ。

明治30（1897）年秋頃に、古墳の一部を開墾した時に横穴式石室が開口した記録が残っており、石室内の朱塗りの木棺から出土した画文帯神獣鏡、刀剣約50本、勾玉・管玉などの玉類、金環、須恵器等の副葬品の様子が明らかとなっている（沢井1969？・清原1976）。しかし、この時に持ち出されたほとんどの副葬品の所在は明らかとなっておらず、詳細は不明である。そして、昭和３（1928）年頃に西側半分の墳丘封土が削平され、ほとんどの石室の石材等は石垣に転用されたという。その後、住宅が建設され、東側の高まりは、宅地の庭園の一部として利用されていた。以降、八尾市史編纂時に墳丘測量が行われた（八尾市史編集委員会編1988）が、発掘調査等は実施されていない。

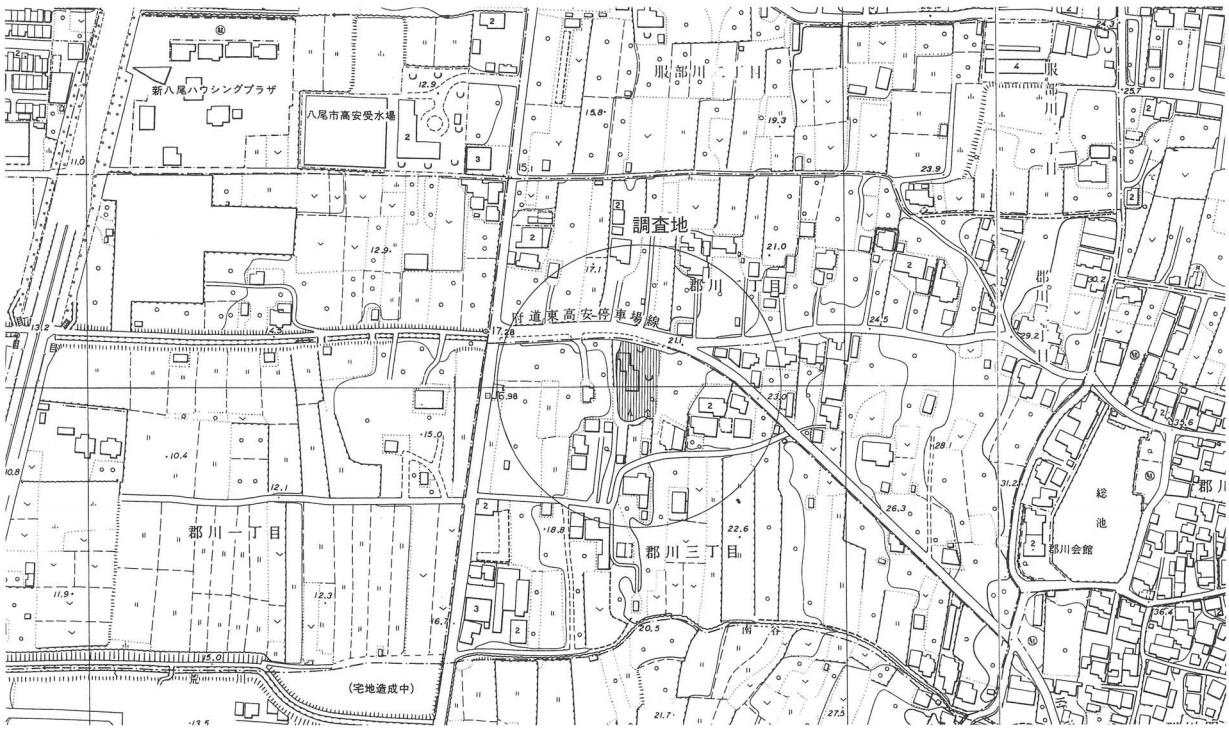
盾形状の申請地内における墳丘残存部分は、申請地内の中央から東側と考えられ、現況では前方後円墳の形状を示すような段築等は明らかでなく、比較的平坦で、周囲は石垣が積まれていた。東側南端には「東塚」の石碑や鳥居があり、この付近に横穴式石室があったと考えられるが、調査前の状況では判然としなかった。また、申請地南西側の石垣下付近には、多数の50cm～70cm大の石材が点在しており、石室から持ち出された石材の可能性があった。

【参考文献】

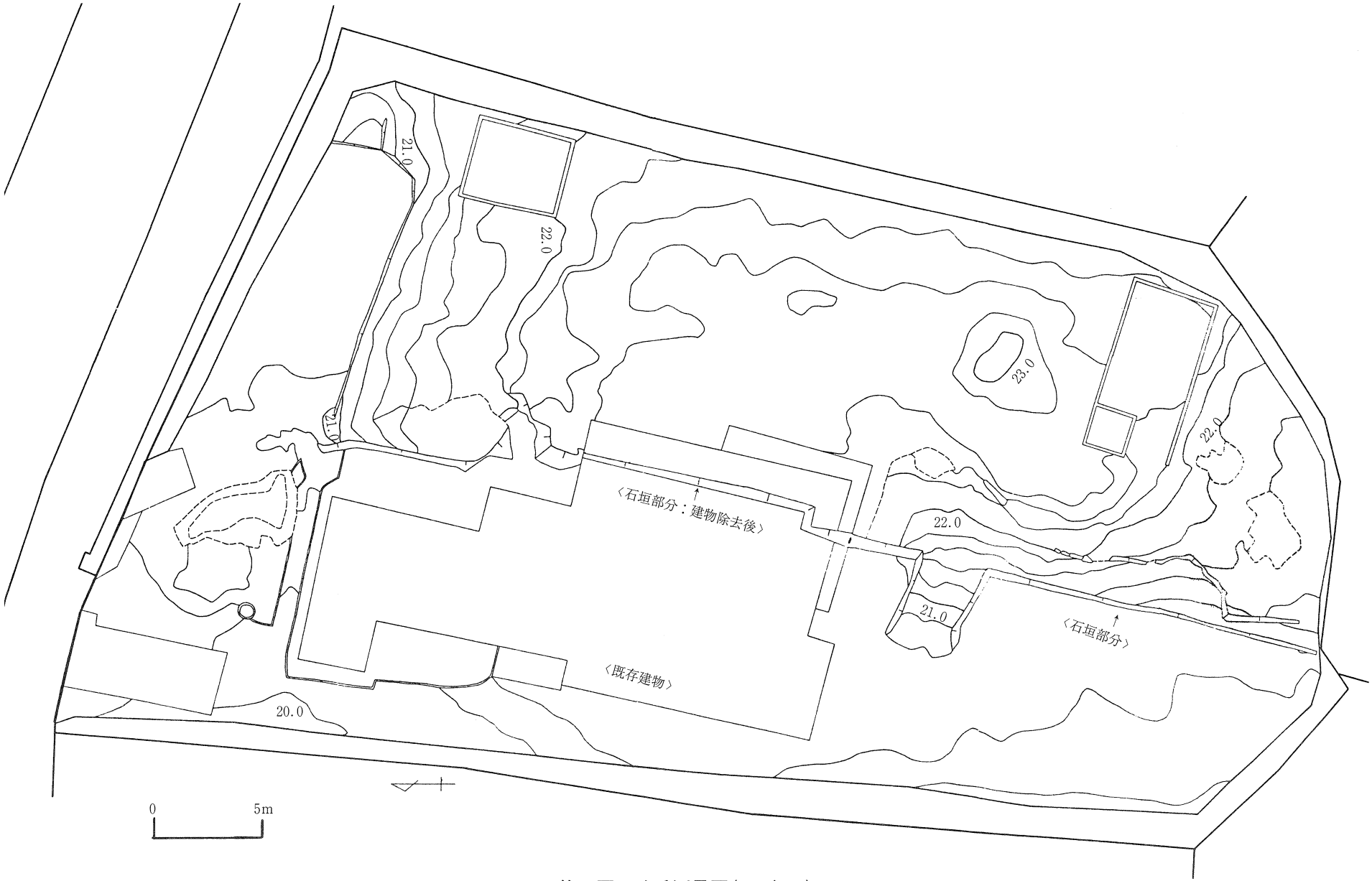
沢井浩三　1969?『八尾の古文化財　その１古墳』八尾市教育委員会

清原得巌　1976「高安の遺跡と私」『大阪文化誌』第６号　（財）大阪文化財センター

八尾市史編集委員会編　1988『増補版　八尾市史（前近代）本文編』八尾市



第17図　調査地周辺図（１／5000）



第18図　墳丘測量図（1／250）

4．調査方法と概要

今回の分譲住宅建設に伴う宅地造成工事等の事業計画地が、前方後円墳である郡川東塚古墳の範囲と考えられることから、墳丘の形状や遺存状況及び主体部（埋葬施設）の位置等の古墳の内容を把握するために、申請地内の測量を実施（註1）した後、人力掘削によって表土及び流入土を除去し、遺構確認調査を実施した。調査面積は約108㎡を測る。

申請地内南側の後円部想定付近で、明治期に開口した横穴式石室の位置を確認するために、東西方向の調査区を５ヶ所の調査区を設定した。申請地内の現状で最も高さのある部分を含む東西方向の最も長い調査区を第１区とし、以降南側に第２区、第３区、第４区を設定し調査を行い、その後、第２区と第３区の間に第５区を設定した。

申請地内中央の南北方向に続く石垣を境にして、西側の宅地のあった一段低い部分と、現況庭園であった部分とに分けられる。西側の一段低い部分では、石室石材の可能性がある多数の大きな石材が散布しており、これらをまず移動させた。そして、積まれた石垣の一部を取り除いて、調査を行った。

後円部付近の概要：第１区では、石室の存在を示すような土層は確認できず、調査区東端で後円部東側斜面付近の葺石の一部を確認した。

南側の第２区・第３区・第４区の調査区では、石室石材は確認できなかったものの、南北約５ｍ以上、東西約4.5mに及ぶ石室攪乱範囲の上面を確認し、石室攪乱後に石室を埋め戻した様子が明らかとなった。そして、第３区と第４区の調査区西側では、石垣のあった付近下層で、人頭大の敷かれた石材を確認した。横穴式石室そのものではないものの、石室構築に伴う遺構と考えられ、敷石の広がりと性格を確認するため、第２区と第３区の間に調査区（第５区）を拡張した。第３区では、石室攪乱層の掘り下げを行い、石垣から東に約４ｍで石室（玄室）東側壁の基底（一段目）石材を一石確認したが、南北方向には続かず、石室床面までに攪乱が及んでいることが明らかとなった。

石室の攪乱範囲については、後日追加調査を実施した。側石は一石のみであったが、明治以降破壊された石室石材の抜き取り痕を確認し、平面プランから横穴式石室の位置と形状を確認することができた。

前方部付近の概要：そして、申請地北側の前方部想定付近に、２つの調査区を東西方向に１ヶ所（第６区）、南北方向に１ヶ所（第７区）設定し、調査を行った。第６区では前方部東側の葺石の一部と前方部から後円部に続く南北方向の埴輪列を約3.6m検出し、計11個体の円筒埴輪を確認した。

第７区では前方部に石室の存在を示すような土層は確認できず、北へと傾斜していく墳丘面を確認した。しかし、墳端・段築平坦面及び埴輪列は確認できなかった。

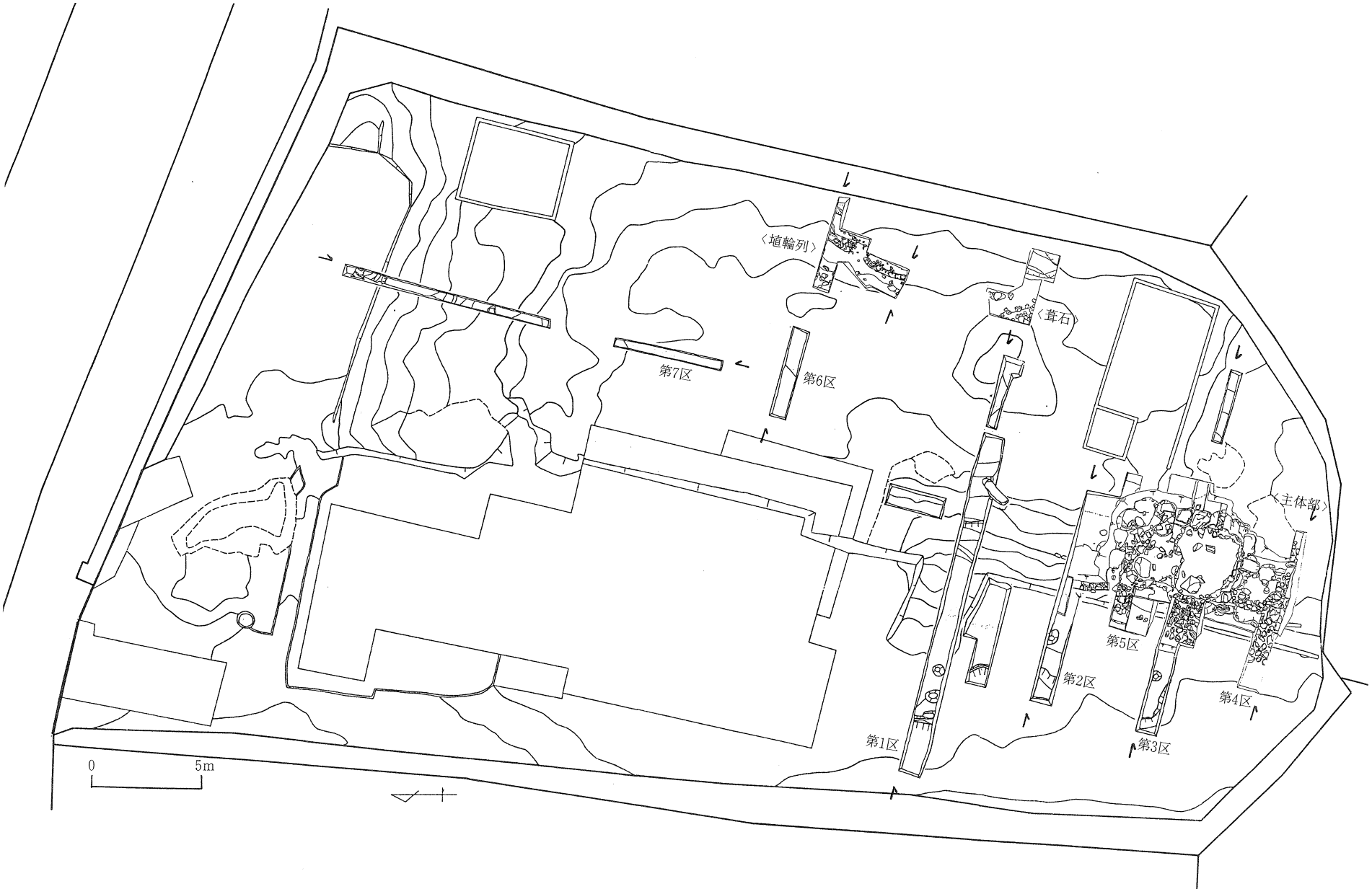
5．各調査区の概要（第19図～21図参照）

第１区（第22図参照）：申請地内に東西方向に設定した長さ約24m、幅約0.8mの調査区である。墳丘面は、地表下約0.2m～約1.2mで確認できた。墳丘構成層は、黒褐色系砂質土と黄灰色微砂層によって固くしまっており、盛土構築により墳丘が築造されたことがわかる。

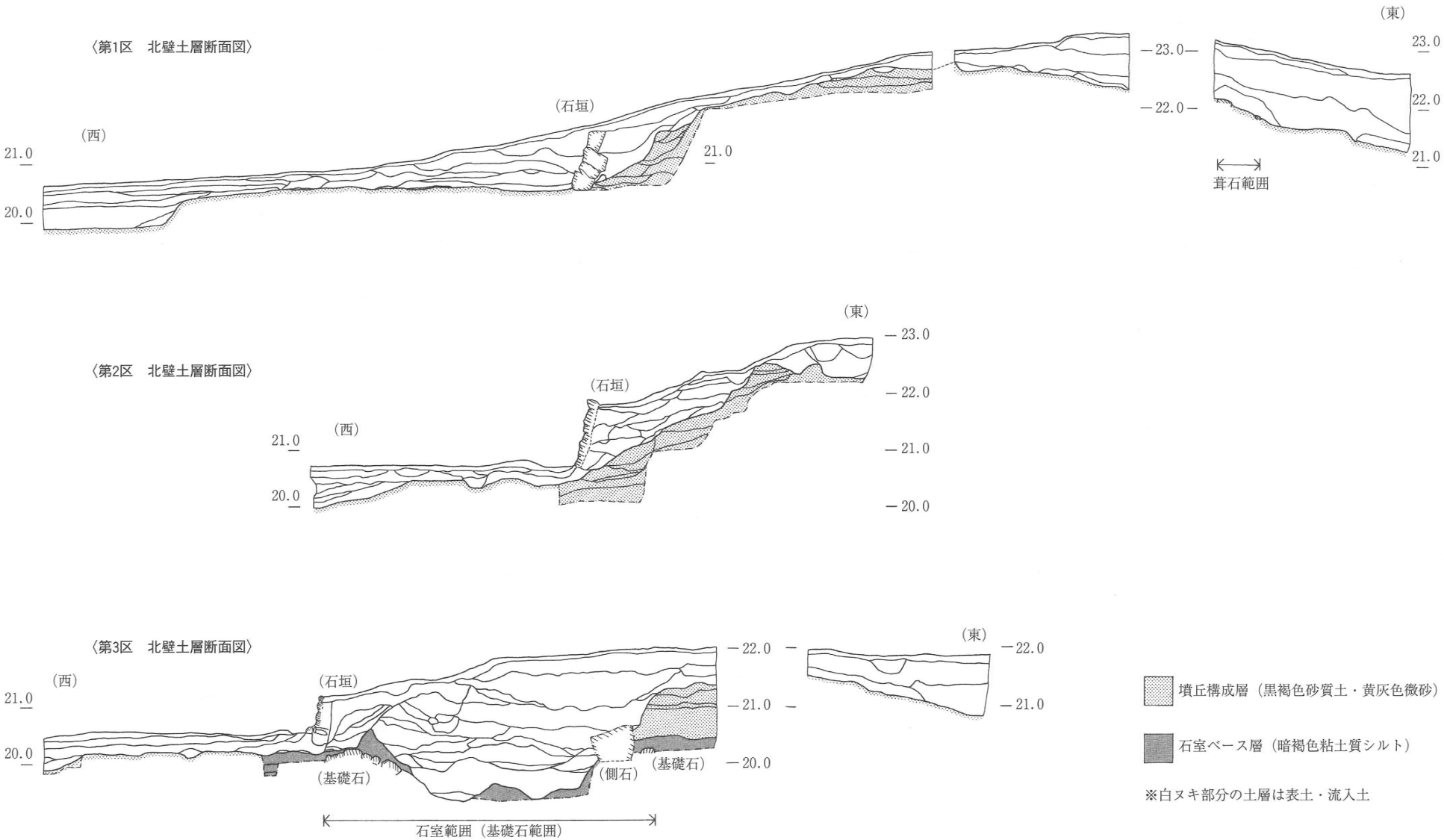
調査区東端で、後円部東側斜面の葺石の一部を約1.5mの範囲で確認した。調査区内では、葺石の区画石列等は確認できなかったものの、葺石検出範囲の北東部裾では若干平坦な石材を使用しており、段築裾の基底石の可能性がある。葺石のほとんどは、こぶし大強の角礫を使用していた。葺石範囲外側が、落ち込んでいたが、下段築部分に続くのかは判然としなかった。調査区内で埴輪列は確認できなかった。

調査当初石垣との新旧関係が不明であった西側削平部分と墳丘残存部をつなぐスロープ状の傾斜は、スロープ状の盛土内に石垣が存在しており、石垣構築後の後世の盛土であった。また、第１区の北側・南側の調査区を拡張し、墳丘面を確認した。そして、調査区西端では落ち込みがあり、円筒埴輪の破片数点が出土している。

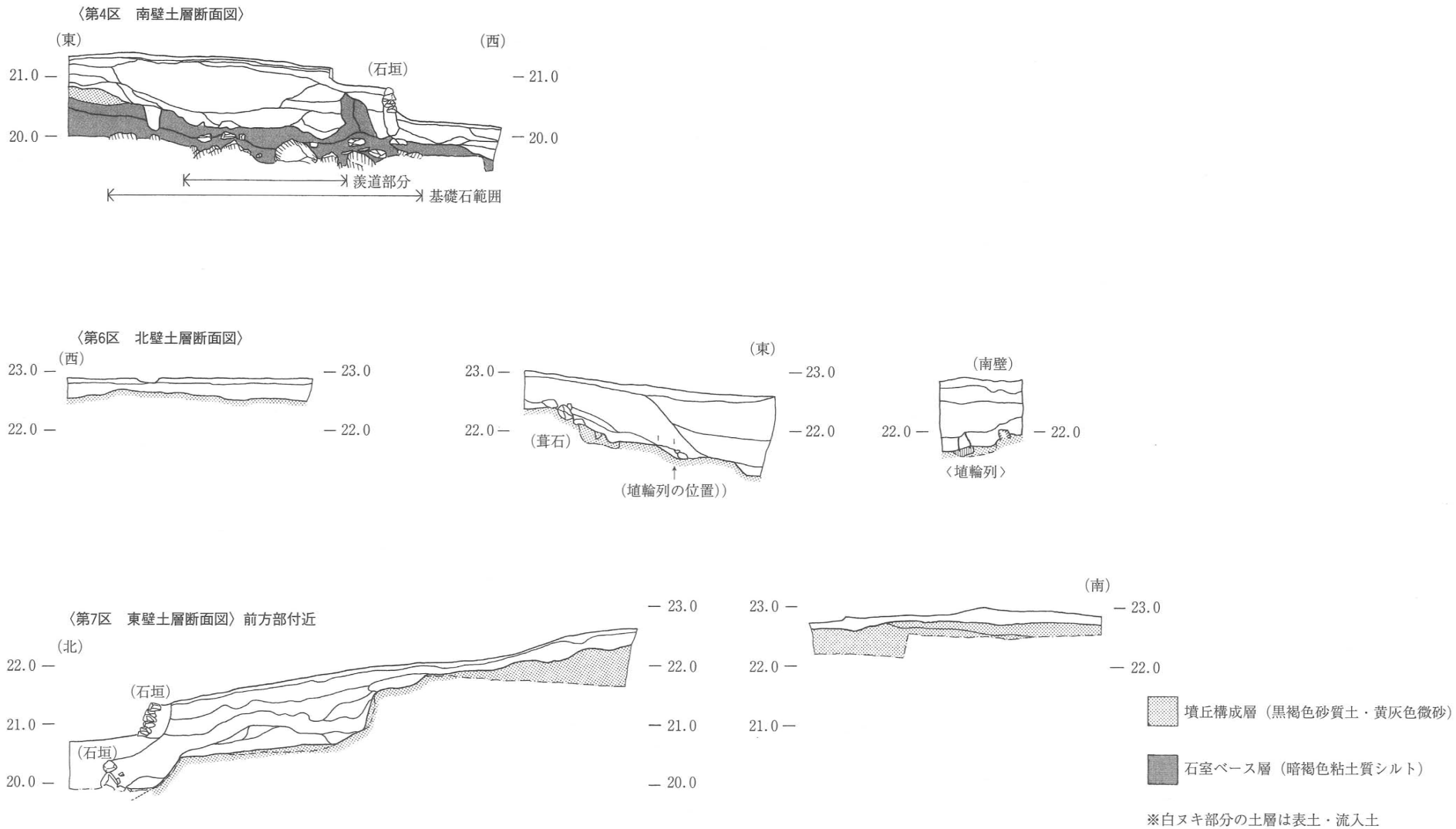
第２区：第１区南側の長さ約10mの調査区である。墳丘面は、地表下約0.3m～約1.1mで確認できた。この調査区では、石室の存在を示す遺構・土層は確認できなかったが、唯一、石垣下層付近の調査区中央南端で、第３区～第５区で検出した石室構築の基礎石と同様の石材が一石確認できた。そのため、石室範



第19図　調査区及び遺構平面図（S＝1／250）



第20図　土層断面図①（S＝1／100）



第21図　土層断面図②（S＝1／100）

囲の北端付近になると考えられる。また、第１区と同様に調査区西端は落ち込んでいた。

第３区・第４区・第５区：第３区～第５区では、墳丘構成層は、地表下約0.3m～0.5m前後で、東端や西端で確認できたが、削平を受けた墳丘面であった。そして、第３区・第５区の西側で、地表下約0.3m前後で、南北約５m以上、東西約4.5m、最大深約2.5mに及ぶ隅丸方形状の石室の攪乱範囲が確認できた。この範囲が石室位置を示すものであると考えられる。墳丘構成土である黒褐色砂質土、暗灰黄色微砂、暗灰色粘土質シルトによって、石室範囲全体を埋め戻しており、攪乱層から、埴輪・須恵器・土師器・鉄製品・瓦・陶磁器等が出土している。石室部分を墳丘残存高まで埋め戻した後、南北に続く石垣を積んでいった。

先述したように、各調査区西側の石垣付近下層の敷石や石室石材の一石が確認でき、この範囲が石室であったと推測される。各調査区の範囲では全体像は不明であった。そして、その後の追加調査により横穴室石室全体の様子が把握できた。

横穴式石室について（第23図参照）：現位置で検出した石室石材は、玄室東側壁の基底石にあたる一石（一辺約0.8m大）のみであった。石材は、玄室内側に縦約0.4m・横約0.7mの面取りをしており、長方形状を呈している。そして、石室を持ち送るため、内側に傾斜して置かれていた。但し、この石材も本来の大きさではなく、石室攪乱時に打ち割られたようで、石材上部に円形の鑿状痕跡が残っていた。

石室の平面プランは、検出した抜き取り痕を含む羨道部分は、南北約2.5m、東西幅約2.8m、玄室部分は南北幅約６m、東西幅約4.6mを測る。本来の石室高、天井石の数等は確認できなかったが、奥壁の抜き取り痕の基底高から、北外側の墳丘残存高との比高差が約1.6m前後あり、石室高を復元する上で検討材料となる。また、石室攪乱内に、石室石材の可能性がある約0.8m大の巨石が２石転落していた。

石室床面は、かなりの攪乱を受けており、特に玄門付近は大きく掘削されている。床面想定高から攪乱底までの高さは約1.0mの比高差がある。床面は水平でなく、敷石が南西方向に大きく移動して傾斜しているなど、露出した石室基礎の敷石と判別しにくい。墳丘が削平された西側へと石室石材を持ち出したと考えられ、石室平面プランでも西側壁部分が削平を受けている。また、石室攪乱層中より角の取れた約10センチ前後の円礫が出土しており、これらが床面に敷き詰められていた可能性がある。

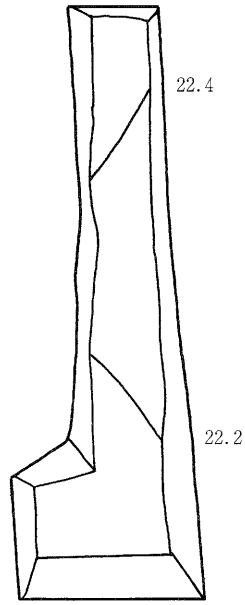
羨道部分についても側石は確認できなかったが、西側で床石が一部残存している。羨道部分と玄室部分の高低差は約0.3mあり、羨道が高く、玄室に向かって緩やかに傾斜していったようである。

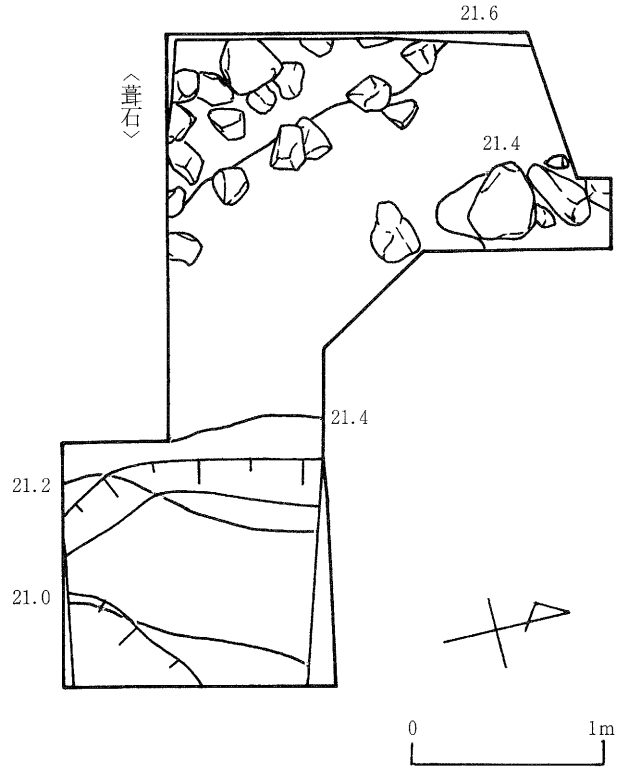
石室下層について：第３区～第５区で確認した人頭大の敷石は、当初石室床石と考えたが、石材が水平面を持たず、石材相互の上面のレベル高が必ずしも合わないことから、床石ではなく石室構築に関連する石材であったと考えた。そして、石室平面プランの確認に合わせて、敷石の範囲もほぼその下層に東西約６m、南北約９mに広がることを確認した。敷石は、石室のベース層となる暗褐色～暗灰色粘土質シルト中に２層以上積まれており、厚さは約0.6m以上あった。但し、今回の調査範囲では敷石の厚さは、把握できなかった。

巨石を使用した横穴式石室の安定を図るために、人頭大の礫と粘土を使用して石室ベース層を構築し、その上部に石室を構築した。今回確認した敷石の性格は、「石室基礎石」であると考えられる。「石室基礎石」は、石室側壁の位置を石室ベース層構築段階で計画していたようで、第５区南壁で確認した約0.5mの基礎石は、他の基礎石よりも大きく、南北方向に同様の大きさの石材が数点確認でき、石室側壁の想定位置のほぼ直下に位置している。また、東側石の南側の抜き取り痕にトレンチを入れ、側石直下の基礎石の状況を確認したところ、ほぼ側石の傾斜に沿って、石室ベース層の暗褐色粘土質シルト層中の基礎石が敷かれていた。これは、側石位置を想定して特に基礎石を設置しており、墳丘構築及び石室構築には各段階の作業工程があることを示している。

第６区（第24図参照）：地表下約1.0m前後で検出した埴輪列は、近接して樹立された円筒埴輪が約3.6mの間に11個体ある。北から４個体が続き、後世に１個体～２個体分が流出したようで一部埴輪列が途切れ、さらに南に７個体が続く。調査区北端の埴輪列上部では、第１区で確認した葺石よりもやや大ぶりな石材を使用した前方部斜面の葺石を確認している。また、埴輪列付近には、葺石石材と大きさの異

〈第1区〉

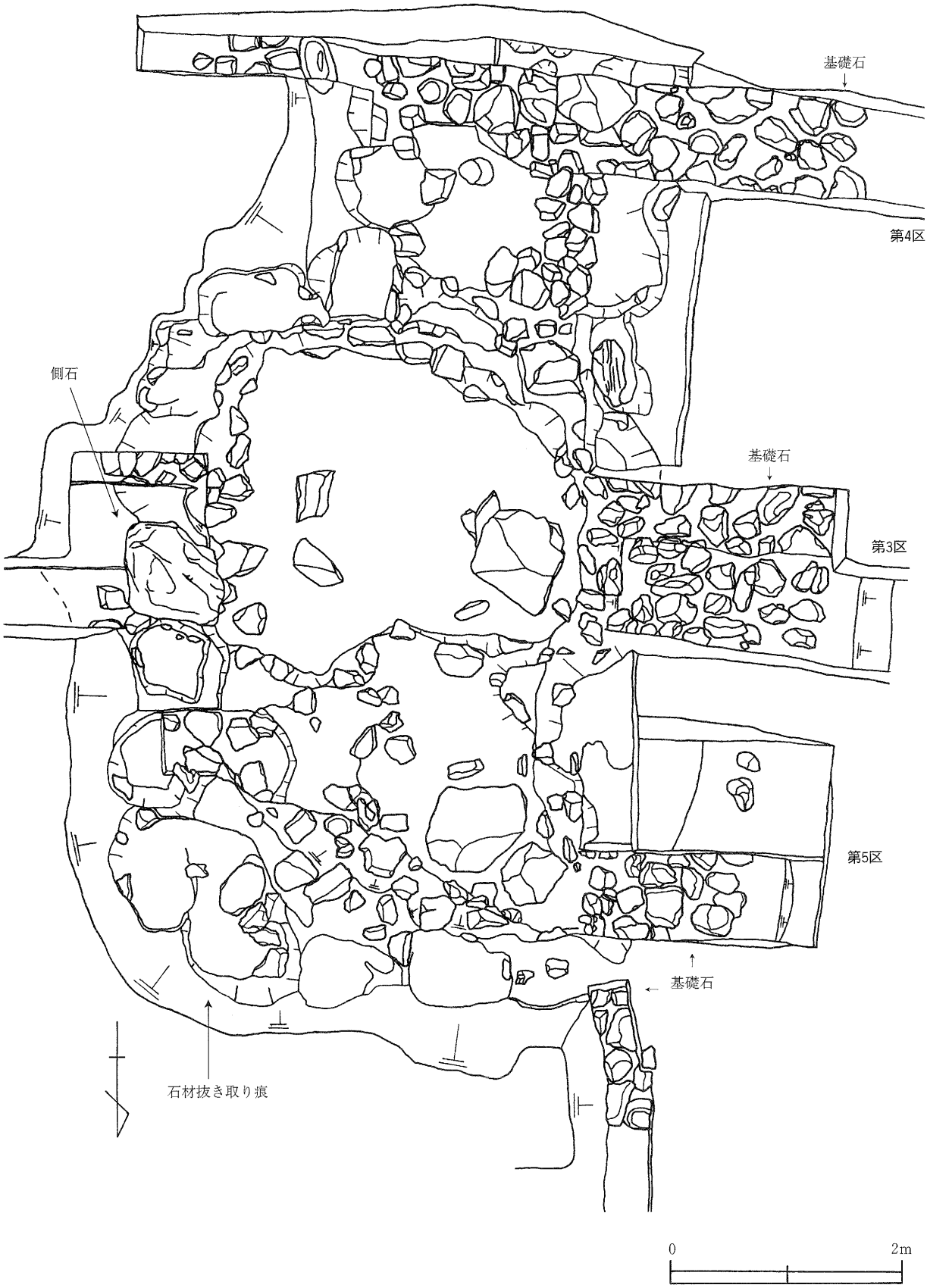




※図中の等高線の高さは、墳丘測量図に準ずる

第22図　遺構平面図①（S＝1／40）

〈後円部　横穴式石室部分〉



第23図　遺構平面図③（S＝1／50）

なるこぶし大の礫が出土しており、埴輪列平坦面に敷かれていた可能性がある。埴輪列から東側は、緩やかに落ち込んでいくものの、段築平坦面の幅は確認できなかった。

埴輪列は、幅約0.3m、深さ約0.1mの布掘り状の掘り方としている。そして、円筒埴輪を設置した後、掘り方を円筒埴輪の一段目まで埋戻し、円筒埴輪内部にこぶし大の礫を１～２個置き、最下段の部分まで埋め戻していた。この礫は検出した円筒埴輪すべてに見られ、おそらく円筒埴輪を固定するためであったと考えられる。２段目のスカシをほぼ東西方向に向けて設置していた。

また、埴輪列の西側（円筒埴輪11付近）では、墳丘上から転落したと考えられる須恵器の大甕の破片（体部）が出土している。

第７区：南北長約15m調査区である。墳丘面は、地表下約0.2m～約1.2mで確認できた。墳丘上面では、表土直下に墳丘面が確認できるものの、調査区北端では、大きく落ち込んでおり、段築・埴輪列等は確認できなかった。また後世の石垣が２時期にわたって積まれており、前方部北裾は確認できなかった。出土遺物はほとんど出土していない。

６．出土遺物（第25図～28図参照）

①円筒埴輪（１～16）：第６区の埴輪列北側から番号をつけた埴輪列中のもの（１～11）とその他底部や口縁部の破片（12～15）が墳丘上から多数出土している。埴輪列中の円筒埴輪を観察すると、外面調整のハケはすべてタテ・ナナメハケの一次調整のみで、一部に外面をナデ調整のみの埴輪が見られた。最下段の調整は、ナデ調整等のみで省略されている。タガの形状は、突出せずやや扁平な台形やM字形を主体としている。また、円形のスカシは、２段目と３段目にある。これら円筒埴輪は、川西編年・期の特徴を示している。底径は、約15cm～17cm前後である。また、口縁部下部にヘラ記号を持つ破片が見られた。全形を復元できるものはなかったが、器高は約40cm前後で、３条突帯４段構成の円筒埴輪であったと考えられる。

また、第１区の西端落ち込みでは、最下段のタガに断続ナデ技法のもの（12）が見られた。また、朝顔形埴輪の口縁部破片（16）を確認している。

②形象埴輪：蓋形埴輪の破片が出土しているが、笠部及び立ち飾りの小片がわずかに出土しているだけで、その構成・概要を知ることはできなかった。

③須恵器（17～22）：須恵器坏蓋(17～21)及び坏身(22)の破片が出土している。坏蓋は直径約15cm前後であり、稜線の突出はわずかである。すべて石室攪乱層の出土で、MT15型式を中心としており、石室内で使用されたものと考えられる。その他に器台の脚部の破片等が出土している。また、墳丘部では、埴輪列西側で出土した大甕の体部片がある。

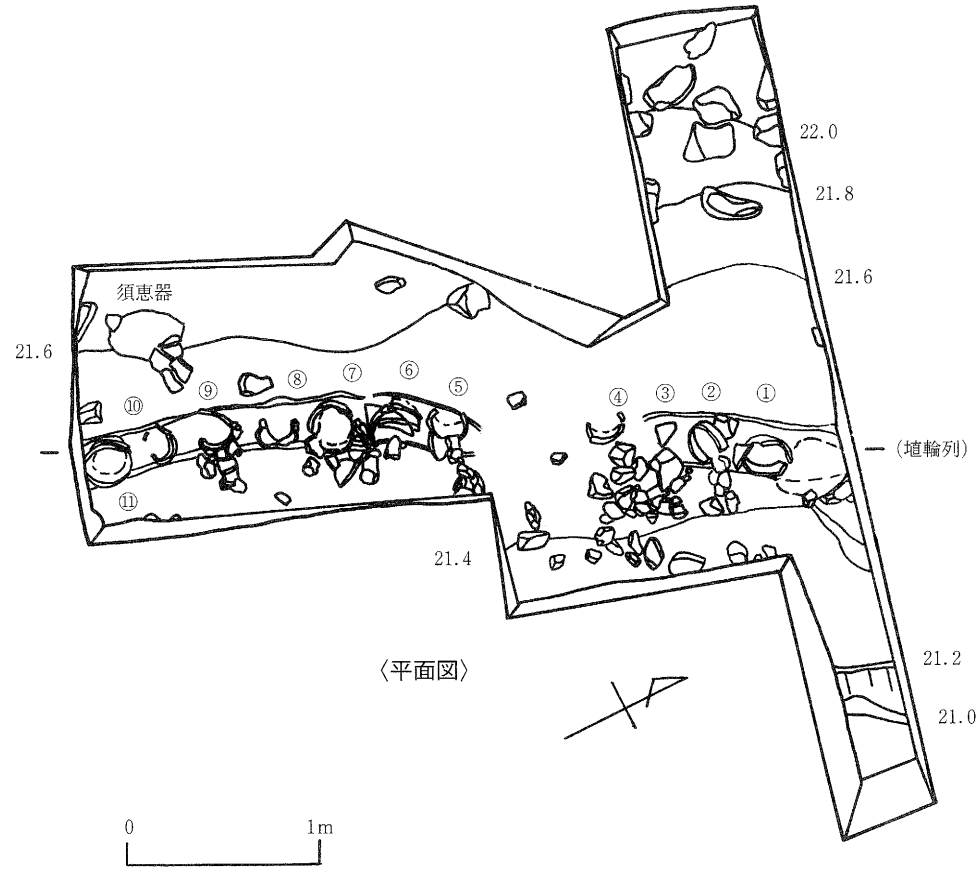
④その他の出土土器（23～27）：墳丘の流入土からは、埴輪以外は多く出土していない。石室攪乱層からは、須恵器以外に石室に伴った可能性のある土師器（23～25）やガラス玉鋳型の土製品（27）の破片、それ以外に埴輪、土師皿、陶磁器や近世瓦等が出土しており、石室に伴う遺物と石室埋戻時に混入した遺物が混在している。また、墳丘構築層から弥生土器・壺（26）やサヌカイト剥片、縄文土器破片が出土しており、墳丘構築以前の様子を窺い知ることができる。

④副葬品（鉄器類：28～35・装身具36）：横穴式石室内の攪乱層から、副葬品の一部と考えられる鉄器類の破片が出土しており、その構成を一部知ることができた。馬具の一部分となるか具（28）、小札（29～33）の破片、鉄鏃（長頸鏃）の両刃の鏃身部（34・35）の破片、また唯一装身具で碧玉製管玉（36）が出土している。

小札は、挂甲もしくは草摺に伴うものであるが、破片がほとんどであることから全体の構成は不明である。縅孔・綴紐・覆輪孔が確認でき、一部革紐の残る部分がある。小札同士が錆着しているものも見られ、その重なりがわずかに確認できる。

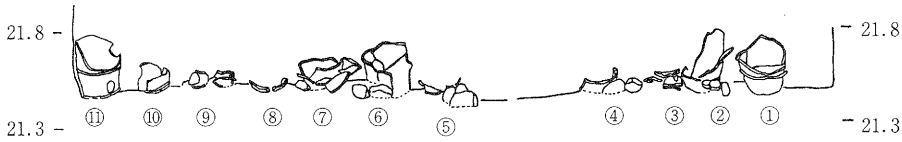
また、図化できなかったが、鉄刀破片、鉄鏃茎部小片や馬具の一部と考えられる形状不明な鉄製品の破片が出土している。

〈第6区〉



〈平面図〉

〈立面図〉



※図中の等高線の高さは、墳丘測量図に準ずる
埴輪列の○の番号は実測図に対応

第24図　遺構平面図②（S＝1／40）

７．まとめ

①墳丘形状　申請地内の東側では、前方後円墳の後円部からくびれ部及び前方部裾の墳丘形状が残っていたことが明らかとなった。申請地西側の墳丘削平部分では、西側に向かって落ち込んでいき、墳丘の段築・形状等は不明である。

東側の墳丘残存部では、現況表土より約0.3mから1.2m前後で墳丘面が確認できる。墳丘斜面には葺石が葺かれており、その下部には墳丘を取り巻いていた東側の埴輪列の一部を検出することができた。墳丘の段築構造及び規模は、確認できなかったが、現況の墳丘残存範囲よりも大きく、北に前方部、南に後円部が位置する全長約50m以上の規模の前方後円墳になると考えられる。

出土した円筒埴輪（Ｖ期）、須恵器（MT15型式）から、郡川東塚古墳は、従来考えられてきたように郡川西塚古墳に引き続いて、造営されたと考えられる。

②石室の位置と形状　後円部にあたる申請地内の南側端中央で、南側に開口部を持つ横穴式石室の位置を確認できた。郡川東塚古墳の主体部は、後円部の１室であったと考えられる。石室は、玄室の東側石が一石残っていたものの、玄室及び羨道の石材がほとんど抜き取られていた。石室石材は、板石や割石ではなく、約0.8m前後の自然石の内壁側を加工したものであった。

石室石材の抜き取り痕から平面プランを復元すると、羨道部分の長さは、南北約2.5m、東西幅約1.4mで３～４石を使用し、玄室内壁部分の大きさは南北幅約５m、東西幅約３mで、南北の側壁に６石、東西の奥壁に４石使用した左肩袖式（玄室から羨道を見た）の横穴式石室と考えられる。これは、両袖式とした清原氏の記録と異なることから、石室プランの復元にあたっては今後の検討が必要である。

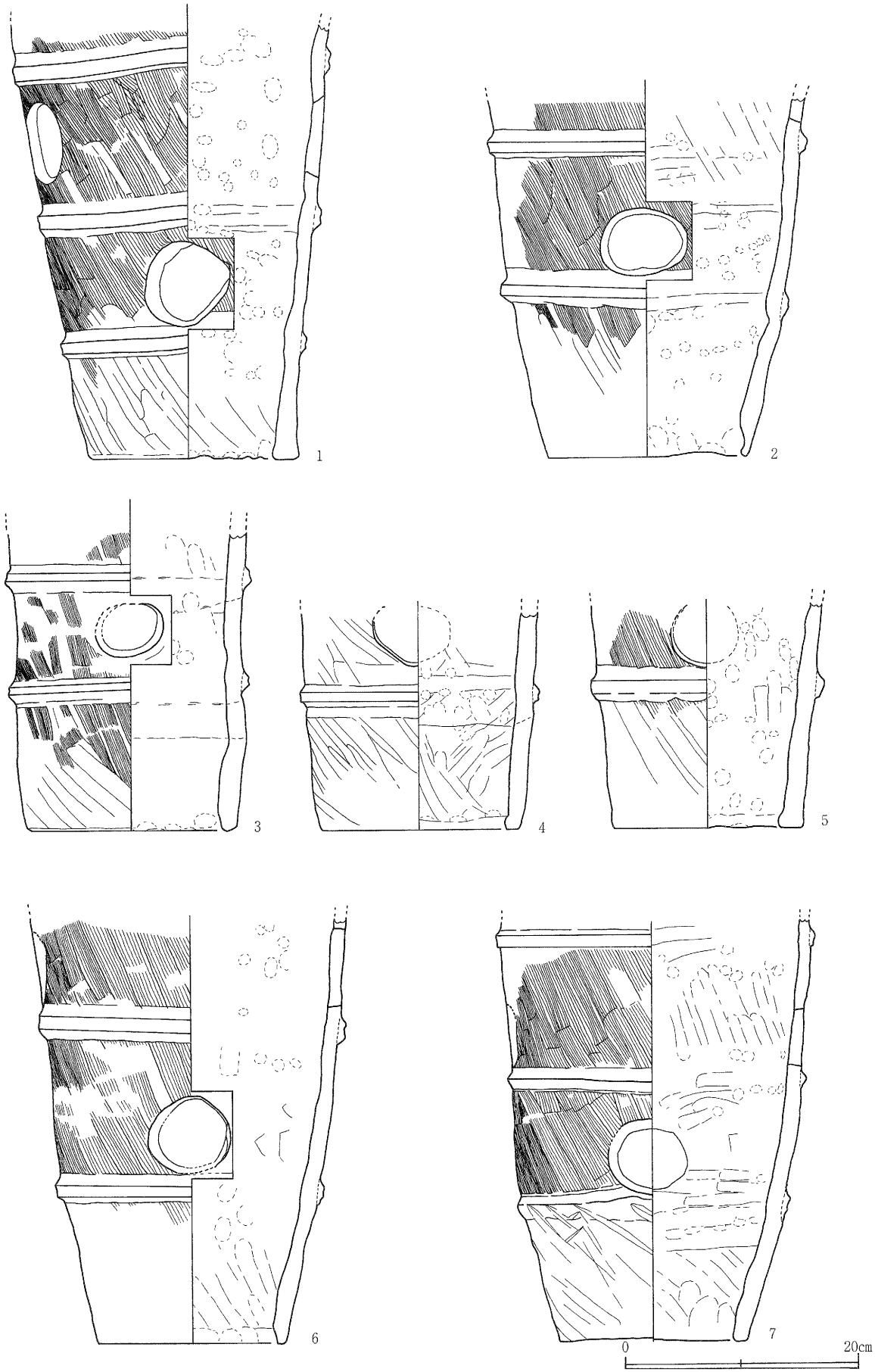
③副葬品　石室床面は、石室の開口した時や石材を抜き取った時にかなりの攪乱を受けていたと思われ、石室内の木棺や原位置を保つ副葬品は確認できなかった。石室攪乱層から、鉄製品の破片（小札・か具・鉄鏃・鉄刀等）や管玉１点、須恵器片が出土しており、副葬品構成の一端を知ることができた。

④石室構築基礎石　石室下層部分には、石室構築に関連する敷石が、東西約６m、南北約９mの範囲で敷かれていたことが明らかとなった。敷石は、石室のベース層構築の基礎石になる。この石室の構築方法は、奈良県市尾墓山古墳や京都府宇治二子塚古墳等の横穴式石室を主体部に持つ古墳時代後期の前方後円墳で確認されている。　（藤井）

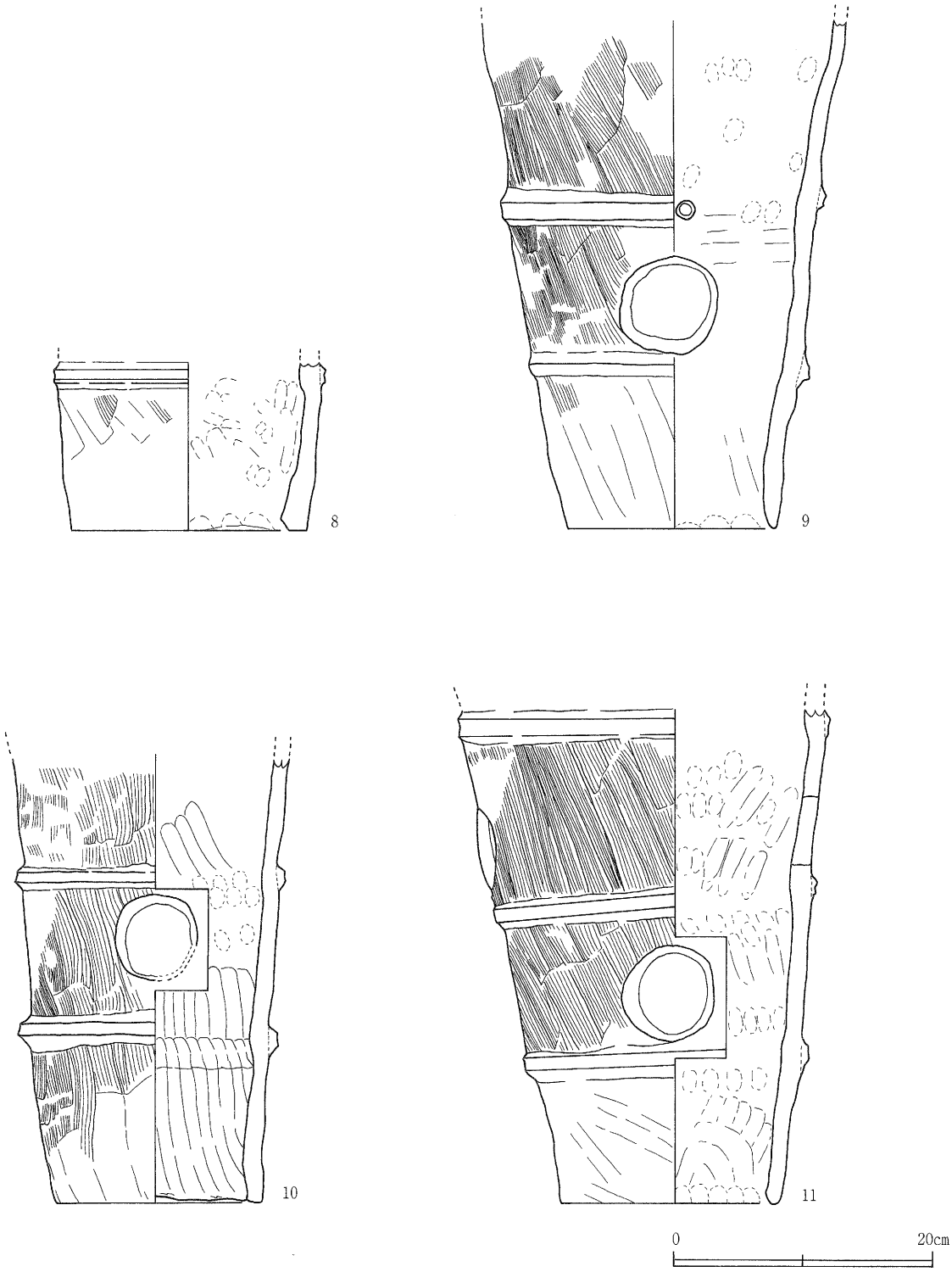
註1）墳丘測量時及び遺構確認調査とその後実施された(財)八尾市文化財調査研究会による発掘調査時の基準点のレベル高が異なっている。そのため、今回の報告にあたっては、発掘調査に準じ修正を行っている。但し、墳丘測量図・遺構平面図の等高線等は修正していない。そのため、文中・土層図及び遺構平面図等で使用したレベル高は、墳丘測量図から－0.235mの高さとなっている。

【参考文献】

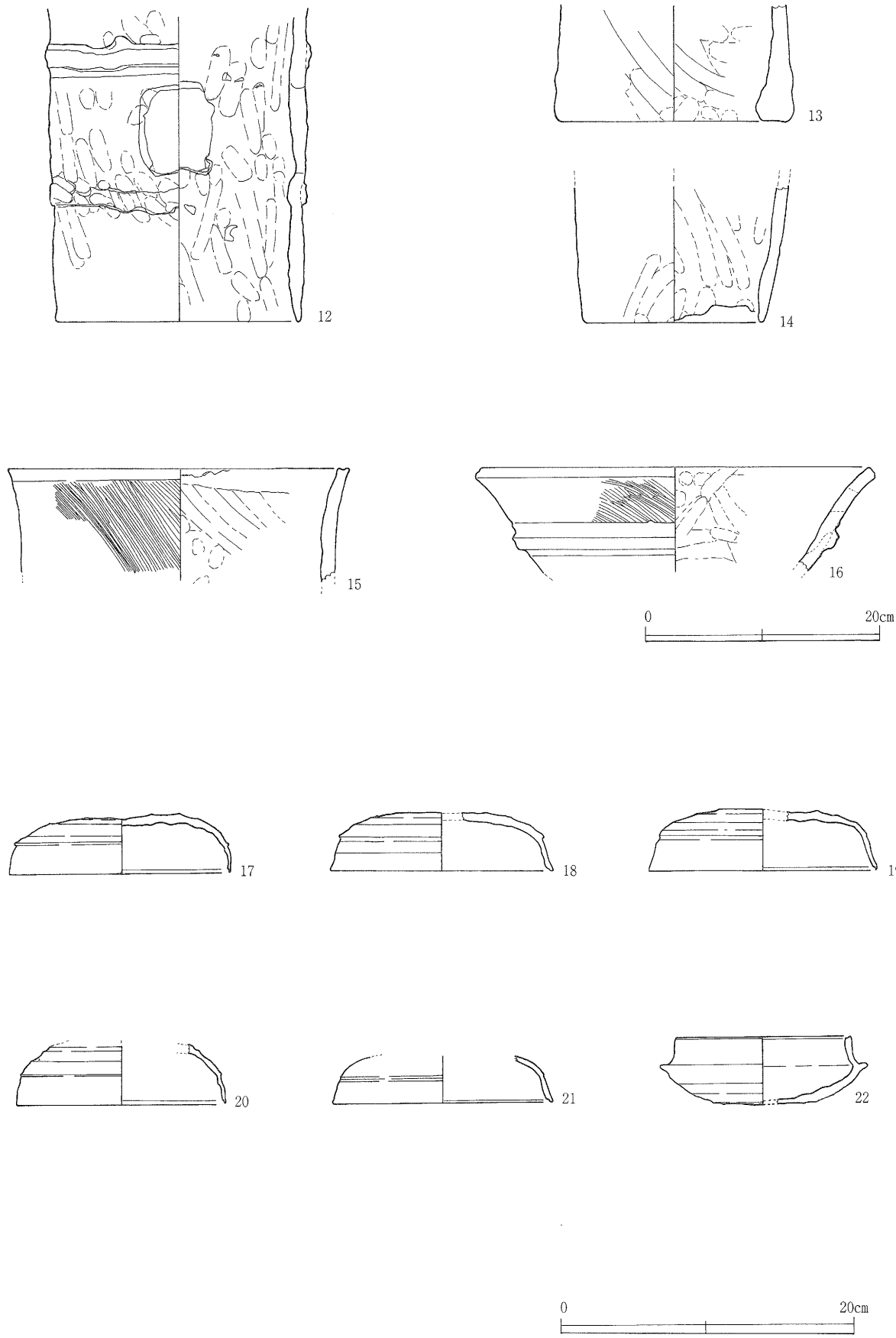
中村浩　1991「大阪府八尾市郡川西塚古墳出土の須恵器の再検討」『大谷女子大学紀要』26-1
杉本宏・荒川史他　1992「五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告」『宇治市文化財調査報告第３冊』宇治市教育委員会
安村俊史・桑野一幸　1996「高井田山古墳」『柏原市文化財概報1995－Ⅱ』柏原市教育委員会



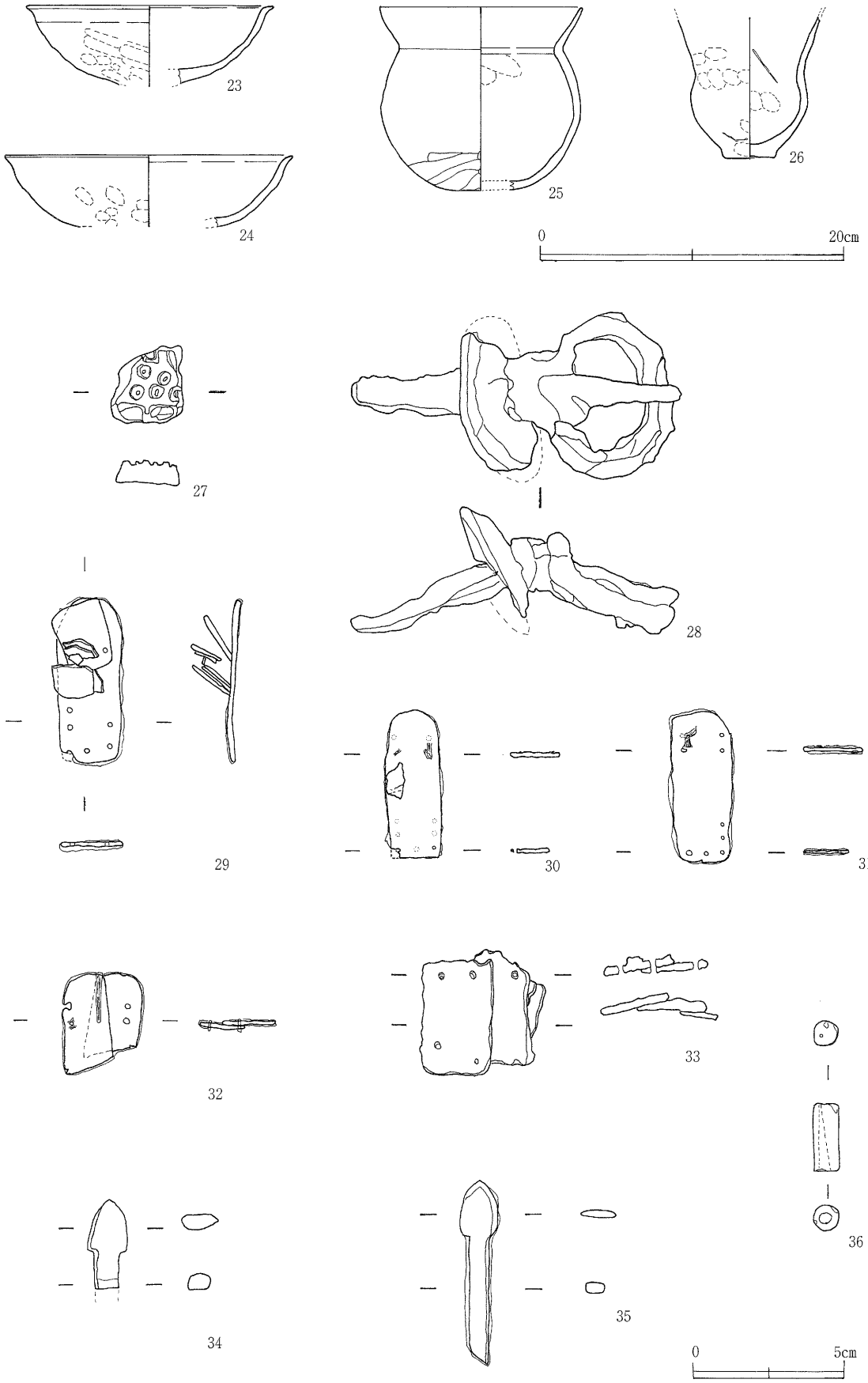
第25図　出土遺物実測図①（S＝1／5）



第26図　出土遺物実測図②（S＝1／5）



第27図　出土遺物実測図③（埴輪：S＝1／5・須恵器：S＝1／4）



第28図　出土遺物実測図④(23～26：S＝1／4・27～36：S＝1／2)

5．郡川東塚古墳（2000－306）　出土遺物観察表

No.	出土地点	器　種	法　　量(cm)	調　整・形　態　等　の　特　徴	色　　調	焼　成	胎　土
1	第6区 埴輪列	円筒埴輪	(残存高) 38.1 (底　径) 16.8	外面：ナナメハケ・底部：ユビナデ 内面：ユビオサエ・ユビナデ	5YR6/6　橙色	やや硬	粗
2	第6区 埴輪列	円筒埴輪	(残存高) 31.3 (底　径) 17.2	外面：ナナメハケ・底部：ナデ 内面：ユビオサエ・ユビナデ	5YR6/8　橙色	やや軟	粗
3	第6区 埴輪列	円筒埴輪	(残存高) 26.0 (底　径) 16.8	外面：ナナメハケ（細）・底部：ハケ・ナデ 内面：ユビナデ	5YR6/8　橙色	やや硬	粗
4	第6区 埴輪列	円筒埴輪	(残存高) 18.9 (底　径) 15.8	外面：ナデ（板状ナデ）・底部：ナデ 内面：ユビナデ	7.5YR6/3 にぶい褐色	硬	やや密
5	第6区 埴輪列	円筒埴輪	(残存高) 19.5 (底　径) 16.0	外面：ナナメハケ・底部：ナデ 内面：ユビオサエ	2.5YR5/6　明赤褐色	やや軟	粗
6	第6区 埴輪列	円筒埴輪	(残存高) 37.2 (底　径) 16.0	外面：ナナメハケ・底部：剥離 内面：ユビオサエ	5YR6/6　橙色	軟	粗
7	第6区 埴輪列	円筒埴輪	(残存高) 36.8 (底　径) 16.0	外面：ナナメハケ・底部：板ナデ 内面：ユビナデ	5YR7/8　橙色	やや軟	粗
8	第6区 埴輪列	円筒埴輪	(残存高) 13.0 (底　径) 18.0	外面（底部）：ナデ 内面：ユビナデ	5YR5/8　明赤褐色	やや軟	やや密
9	第6区 埴輪列	円筒埴輪	(残存高) 39.2 (底　径) 16.0	外面：ナナメハケ・底部：ナデ 内面：ユビオサエ	5YR5/6　明赤褐色	良好	粗
10	第6区 埴輪列	円筒埴輪	(残存高) 34.7 (底　径) 15.9	外面：ナナメハケ・内面：ナナメハケ・ナデ 内面：ユビナデ	10YR7/2　にぶい黄褐色	良好	粗
11	第6区 埴輪列	円筒埴輪	(残存高) 38.6 (底　径) 14.4	外面：ナナメハケ・底部：ヨコナデ 内面：ユビオサエ	5YR7/8　橙色	良好	粗
12	第1区 西側落ち込み	円筒埴輪	(残存高) 33.0 (復元径) 20.4	外面：ユビオサエ・タガ：断続ナデ 内面：ユビナデ	5YR6/6　橙色	良好	密
13	第1区 流入土	円筒埴輪 底部	(復元径) 19.4	外面：ナデ 内面：ユビナデ	5YR6/4 にぶい橙色	軟	やや密
14	第1区 流入土	円筒埴輪 底部	(復元径) 15.0	外面：ユビナデ 内面：ユビナデ	10YR6/6　明黄褐色	軟	やや粗
15	第1区 流入土	円筒埴輪 口縁部	(復元径) 29.0	外面：ナナメハケ 内面：ナデ	5YR6/6　橙色	軟	やや粗
16	第1区 流入土	朝顔形埴輪 口縁部	(復元径) 33.2	外面：ナナメハケ 内面：ユビナデ	5YR6/6　橙色	軟	粗
17	石室攪乱層	須恵器 坏蓋	(口　径) 15.0 (器　高)　4.0	外面：ケズリ・ロクロナデ 内面：ロクロナデ	7.5Y5/1　灰色	良好	密
18	石室攪乱層	須恵器 坏蓋	(口　径) 15.2 (器　高)　4.0	外面：ケズリ・ロクロナデ 内面：ロクロナデ	N5/0　灰色	良好	密
19	石室攪乱層	須恵器 坏蓋	(口　径) 15.6 (器　高)　4.2	外面：ケズリ・ロクロナデ 内面：ロクロナデ	N6/0　灰色	良好	密
20	石室攪乱層	須恵器 坏蓋	(口　径) 14.2 (器　高)　4.1	外面：ケズリ・ロクロナデ 内面：ロクロナデ	7.5Y5/1　灰色	良好	密
21	石室攪乱層	須恵器 坏蓋	(口　径) 15.0 (残存高)　3.0	外面：ケズリ・ロクロナデ 内面：ロクロナデ	N6/0　灰色	良好	密
22	石室攪乱層	須恵器 坏身	(口　径) 12.0 (器　高)　4.7	外面：ケズリ・ロクロナデ 内面：ロクロナデ	5Y6/1　灰色	良好	密
23	石室攪乱層	土師器 高坏	(口　径) 16.4 (残存高)　5.2	外面：ユビオサエ後ナデ 内面：ユビオサエ後ナデ	10YR5/6　黄橙色	良好	密
24	石室攪乱層	土師器 坏	(口　径) 19.2 (残存高)　4.7	外面：ユビオサエ後ナデ 内面：ナデ	5YR6/6　橙色	良好	密
25	石室攪乱層	土師器 甕	(口　径) 13.6 (残存高) 11.0	外面：ケズリ後ナデ 内面：ナデ	5YR6/8　橙色	軟	やや密
26	墳丘構成土	弥生土器 小壺	(底　径)　3.2 (残存高)　9.2	外面：ユビオサエ後ナデ 内面：ユビオサエ後ナデ	7.5YR5/6　明褐色	軟	粗
27	石室攪乱層	土製品 ガラス玉鋳型	(残存幅) 約2.0	—	7.5YR6/4　にぶい橙色	良好	粗
28	石室攪乱層	か具		—	—	—	—
29	石室攪乱層	小札	(長　辺)　5.5 (短　辺)　2.0	—	—	—	—
30	石室攪乱層	小札	(長　辺)　5.0 (短　辺)　1.7	—	—	—	—
31	石室攪乱層	小札	(長　辺)　5.0 (短　辺)　1.9	—	—	—	—
32	石室攪乱層	小札	(長　辺)　3.2 (短　辺)　1.4	—	—	—	—
33	石室攪乱層	小札	(長　辺)　3.8 (短　辺)　2.3	—	—	—	—
34	石室攪乱層	鉄鏃 鏃身	(残存長)　3.0	—	—	—	—
35	石室攪乱層	鉄鏃 鏃身～頸部	(残存長)　6.2	—	—	—	—
36	石室攪乱層	管玉	(長　辺)　2.25 (口　径)　0.88	—	5G3/1　暗緑灰色	—	—

6．神宮寺遺跡（２００１－６４）の調査

１．調査地：八尾市神宮寺５丁目171・172

２．調査期間：平成１３年５月８日

３．調査方法

共同住宅建設に先立ち、敷地内の建物建設予定個所に調査区を２ヶ所（１区１×２ｍ、２区１×２ｍ合計面積４㎡）設定し、それぞれ地表下1.2～1.3m前後まで重機と人力を併用して調査を行った。

４．調査概要

１区

地層

１層　7.5YR4/4褐色細砂混粘土　層厚0.2m。盛土。上面の標高T.P.+19.3m。

２層　7.5YR4/2灰褐色粗砂混粘土　層厚0.2～0.3m。

３層　10YR4/1褐灰色細砂混粘土　層厚0.2～0.3m。

４層　10YR4/6褐色粗砂混粘土　層厚0.2m。上面から切り込む河川１条検出。

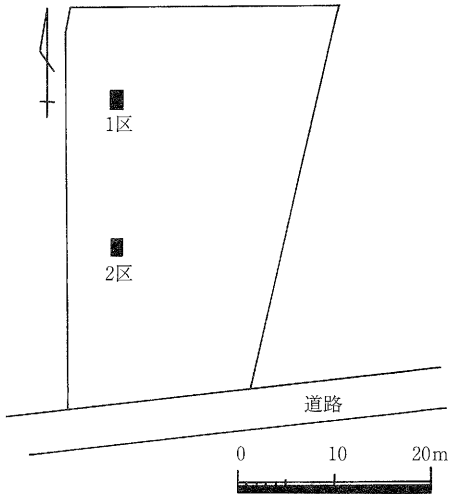
５層　2.5Y5/1黄灰色細砂混粘土　層厚0.2m。弥生時代～古墳時代の遺物を含む地層で、上面（T.P.+18.4m前後）は土壌化している。

６層　5Y5/1灰色シルト混粘土　層厚0.2m以上。

検出遺構

４層上面では、北東―南西方向に伸びる河川を１条検出した。この河川の規模は不明であるが、検出した深さは0.4mを測る。河川内には細砂が堆積しており、砂の堆積で埋没したと思われる。遺物の出土がなく時期の限定は困難であるが、５層内に含まれている古墳時代の遺物よりは新しい時期の遺構と思われる。

第29図　調査地周辺図（１／5000）



第30図　調査区設定図（S＝1／800）

2区

地層

1層　7.5YR4/4褐色細砂混粘土　層厚0.2～0.3m。盛土。上面の標高T.P.+19.4m。

2層　7.5YR4/2灰褐色粗砂混粘土　層厚0.3～0.4m。

3層　10YR4/1褐灰色細砂混粘土　層厚0.3m。

4層　10YR4/6褐色粗砂混粘土　層厚0.15m。

5層　2.5Y5/1黄灰色細砂混粘土　層厚0.2m以上。

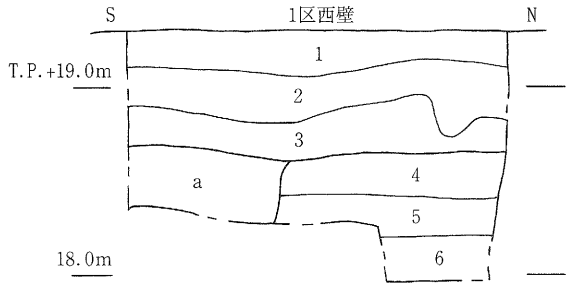
検出遺構

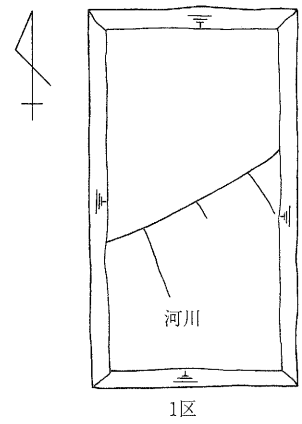
5層は弥生時代～中世の遺物を含む地層で、上面（T.P.+18.4m前後）は土壌化している。

遺構の検出はなかったが、5層内には上記の時期の遺物が含まれていることから、近接する場所に遺構が存在している可能性がある。本調査地の近隣での以前の調査では、弥生時代と中世の遺構を検出していることから、本調査地も集落が存在しているといえる。

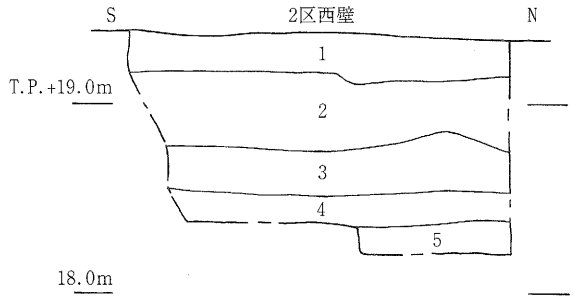
5．出土遺物

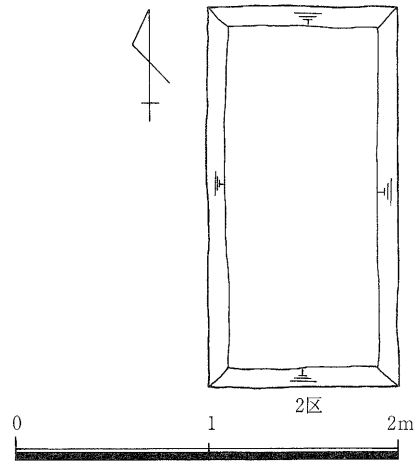
1区の5層からは弥生時代前期と思われる甕の破片1、円筒埴輪の破片2が出土した。1は口縁部外





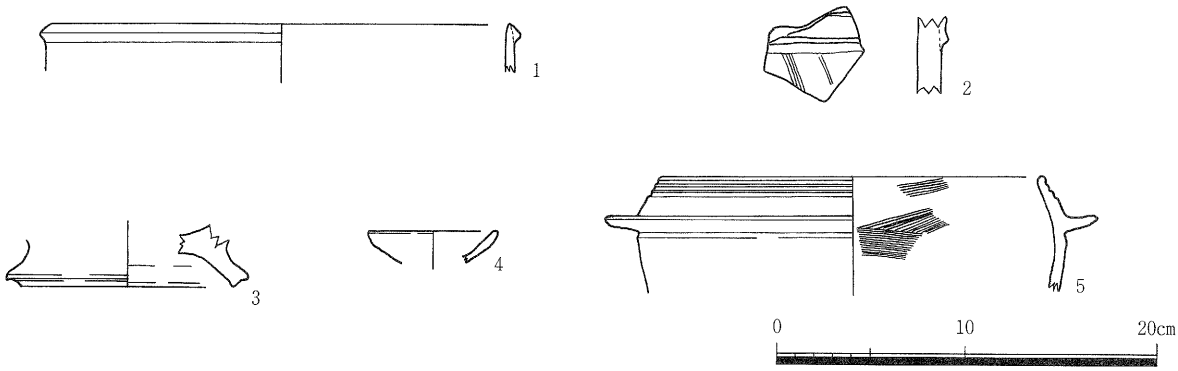
1層　7.5YR4/4褐色細砂混粘土　層厚0.2m
2層　7.5YR4/2灰褐色粗砂混粘土　層厚0.2～0.3m
3層　10YR4/1褐灰色細砂混粘土　層厚0.2～0.3m
4層　10YR4/6褐色粗砂混粘土　層厚0.2m
5層　2.5Y5/1黄灰色細砂混粘土　層厚0.2m
6層　5Y5/1灰色シルト混粘土　層厚0.2m以上





1層　7.5YR4/4褐色細砂混粘土　層厚0.2～0.3m
2層　7.5YR4/2灰褐色粗砂混粘土　層厚0.3～0.4m
3層　10YR4/1褐灰色細砂混粘土　層厚0.3m
4層　10YR4/6褐色粗砂混粘土　層厚0.15m
5層　2.5Y5/1黄灰色細砂混粘土　層厚0.2m以上

第31図　1区・2区平断面図（S＝1／40）



第32図　出土遺物実測図

面に断面三角形の突帯を貼り付ける。内外面ヨコナデ。角閃石を含んでおり生駒山地西麓部の胎土をもつ土器と思われる。2のタガは断面台形で、外面は斜め方向のハケ目、内面ナデを施す。

2区の5層からは須恵器の壷3、土師器の皿4、土師器の羽釜5が出土した。3はハの字に開く高台で、高台径11.0mを測る。内面ナデ、外面回転ナデ。4は小皿で口径約6.8cmを測る。内外面ともに横ナデ。5は口径20.0cmを測り、口縁部外面に凹線を3条施す。鍔の下部には煤が付着している。内面ハケ目。外面ナデ。

6．まとめ

今回の調査では遺構の性格が明確にできなかった。しかし、西隣で調査をおこなった財団法人八尾市文化財調査研究会　第1次調査地では、弥生時代中期や中世の遺構の検出および埴輪などが出土している（岡田清一1997）。また、八尾市教育委員会調査地でも奈良時代の遺構面を検出している（藤井淳弘1998）。このことから、今回の調査地で検出した河川や遺物包含層はこれら遺構面の広がりの一端であると考えられる。

（西村公助）

【参考文献】

岡田清一　1997「Ⅲ　神宮寺遺跡（第1次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告57』（財）八尾市文化財調査研究会

藤井淳弘　1998.3「8．神宮寺遺跡（97－49）の調査」『八尾市内遺跡平成9年度発掘調査研究会報告Ⅰ』八尾市文化財調査報告38　平成9年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

7．東郷遺跡（２００１－２７５）の調査

１．**調査地**：八尾市本町７丁目129番

２．**調査期間**：平成13年12月18日

３．**調査方法**

専用住宅の建設に先立ち、敷地内の建物建設予定個所に2.5×2.5mの調査区を設定し、地表下1.7m前後まで人力で掘削し調査を行った。

４．**調査概要**

盛土以下地表下0.9mまでは耕作土と考えられる微砂質土層（第35図２・３層）が見られ、以下の地表下0.9～1.5mの砂質土層（同４～６層）からは、中近世の瓦・瓦器・陶器などの破片が出土するが整地されたような状況がみられ、遺構は確認できなかった。

また地表下1.5m付近で調査区を横切る形で、溝と考えられる遺構の肩部の落ち込みを確認した（第34図参照）。埋土に含まれる遺物は、瓦・瓦器（椀・羽釜）・土師器などで近世頃のものと思われる。

この下の層は粗砂層となり、0.4m以上続くようである。近隣の調査においても旧河川跡と考えられる堆積が見られることから一時期河川の流路となっていたのであろう。

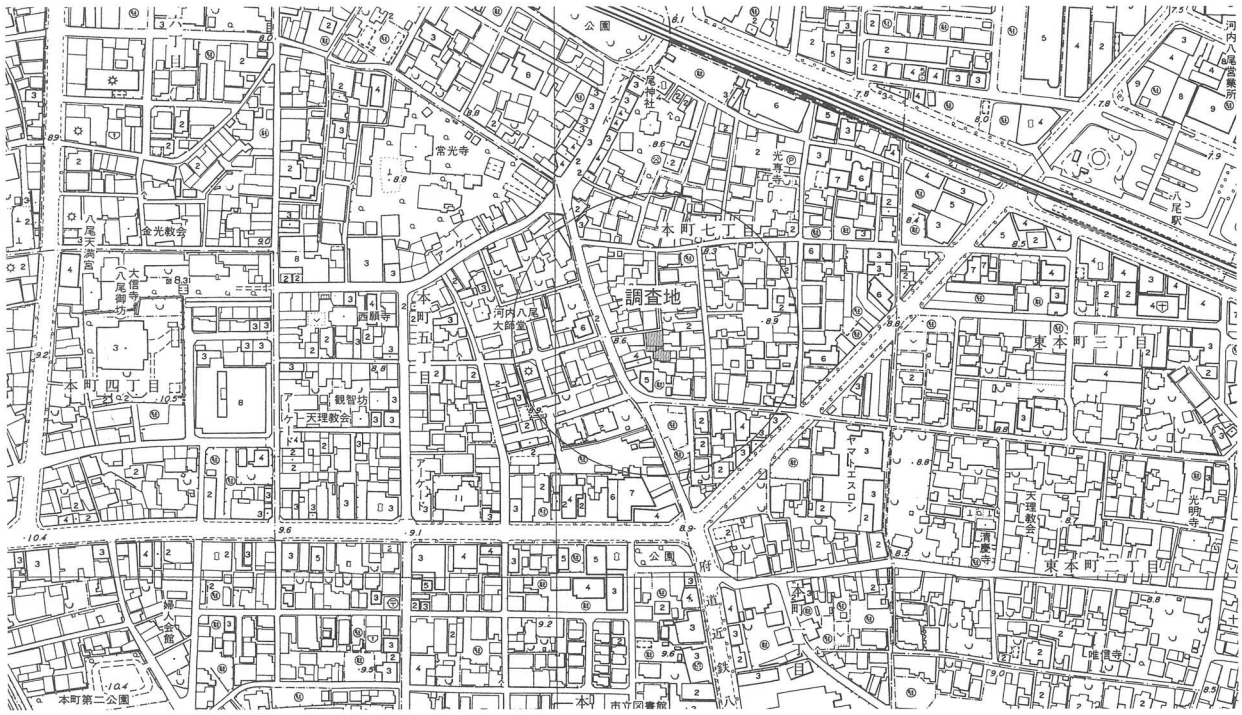
調査面積が狭小なため明確な遺構面は検出できなかったが、整地されたような状況がみられ中世から近世の遺物が混在することから、当該時期においては長期間にわたって集落が営まれていたことがうかがえる。

（吉田珠己）

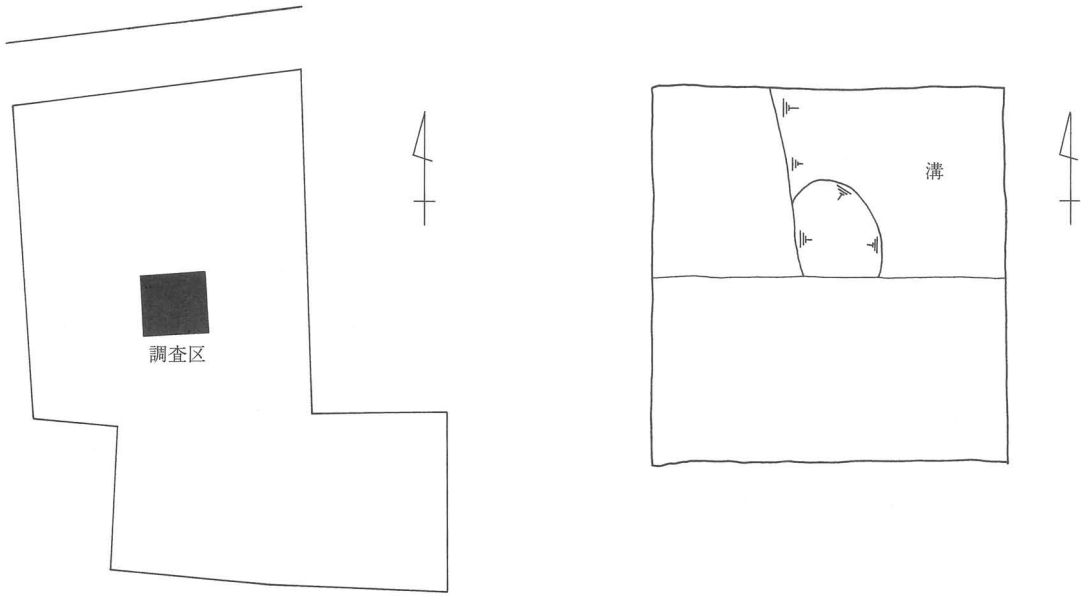
【参考文献】

（財）八尾市文化財調査研究会　『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』　１９９０年

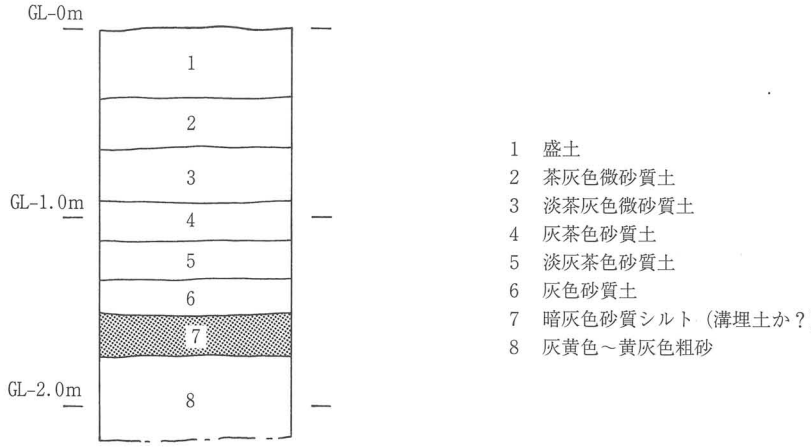
八尾市教育委員会　『八尾市内遺跡平成６年度発掘調査報告書Ⅰ』　１９９５年



第33図　調査地周辺図（１／5000）



第34図　調査区位置図（S＝1／300）・遺構平面図（S＝1／40）



第35図　土層断面図（S＝1／40）

8．東弓削遺跡（２００１－３０）の調査

１．調査地：八尾市八尾木４丁目28-1・29-1・29-3

２．調査期間：平成13年５月９日

３．調査方法

分譲住宅建設に先立ち、敷地内の人孔部分予定箇所に調査区を２ヶ所（2.4×2.4m　面積11.52㎡）設定し、それぞれ地表下約1.5m前後まで重機と人力を併用して調査を行った。

４．調査概要

１区

層序

１層　10YR2/1黒色細砂混粘土　層厚0.3m。現在の耕作土。上面の標高T.P.+10.5m。

２層　10YR5/6黄褐色粗砂混粘土　層厚0.1m。

３層　10YR6/1褐灰色粗砂混粘土　層厚0.2m。

４層　10YR6/2灰黄褐色細砂混粘土　層厚0.3m。

５層　10BG3/1暗青灰色細砂混シルト　層厚0.7m以上。河川内堆積土。

検出遺構と出土遺物

現地表下約0.4～0.6mに存在する３層内からは奈良時代から平安時代ころの遺物の破片が少量出土した。４層上面で調査を行ったが、遺構の検出はなかった。

２区

層序

１層　10YR2/1黒色細砂混粘土　層厚0.3m。現在の耕作土。上面の標高T.P.+10.3m。

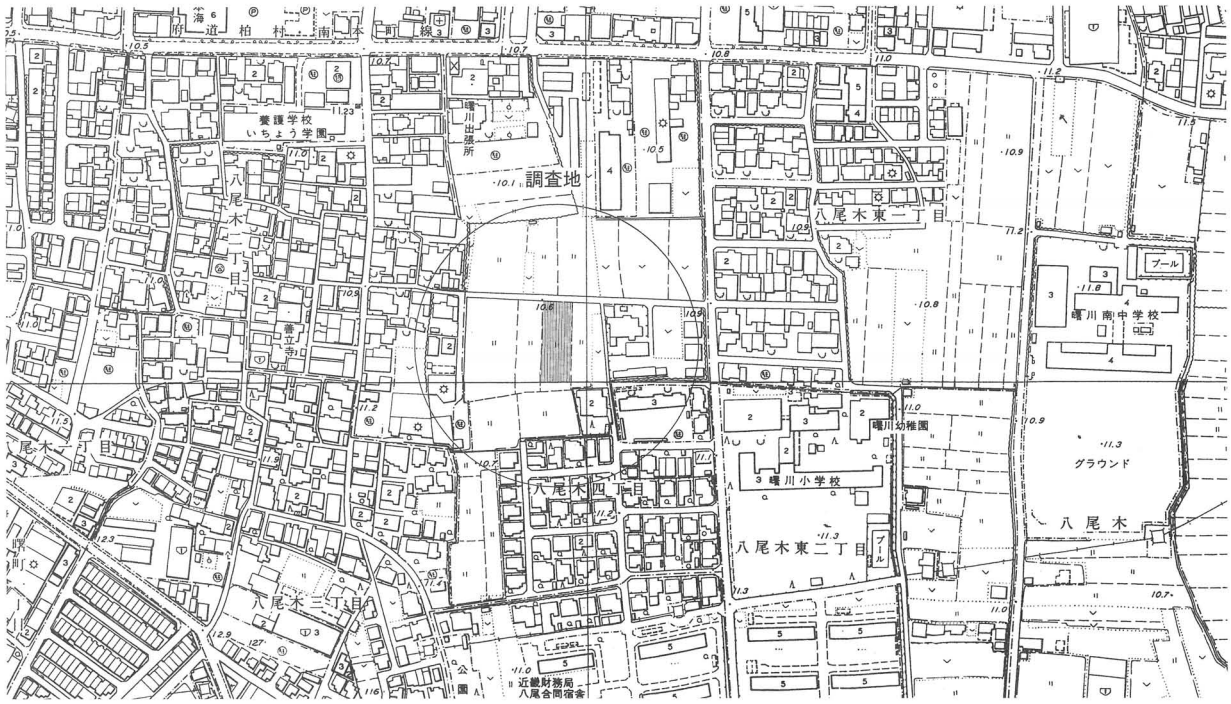
２層　10YR6/2灰黄褐色細砂混粘土　層厚0.2m。

３層　10YR5/2灰黄褐色細砂混粘土　層厚0.1～0.3m。

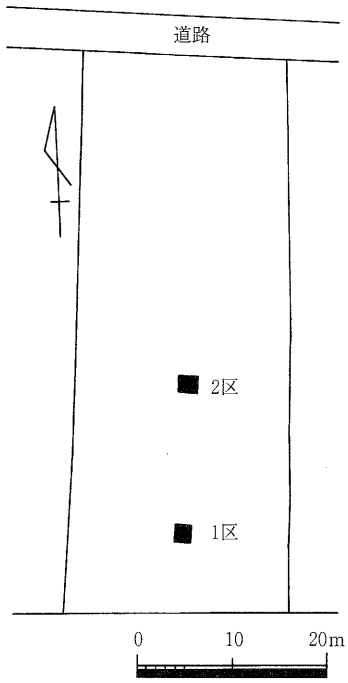
４層　2.5YR3/1暗赤灰色細砂混粘土　層厚0.1～0.3m。

５層　5YR4/1褐灰色粗砂混粘土　層厚0.1m。

６層　2.5Y7/2灰黄色細砂混粗砂　層厚0.5m以上。河川堆積土。



第36図　調査地周辺図（１／5000）



第37図　調整区の設定図
（S＝1／800）

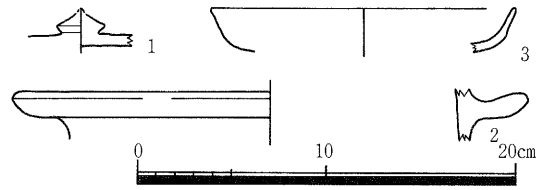
検出遺構と出土遺物

現地表下約0.4～0.6mに存在する３層内からは奈良時代から平安時代ころの遺物の破片が出土した。

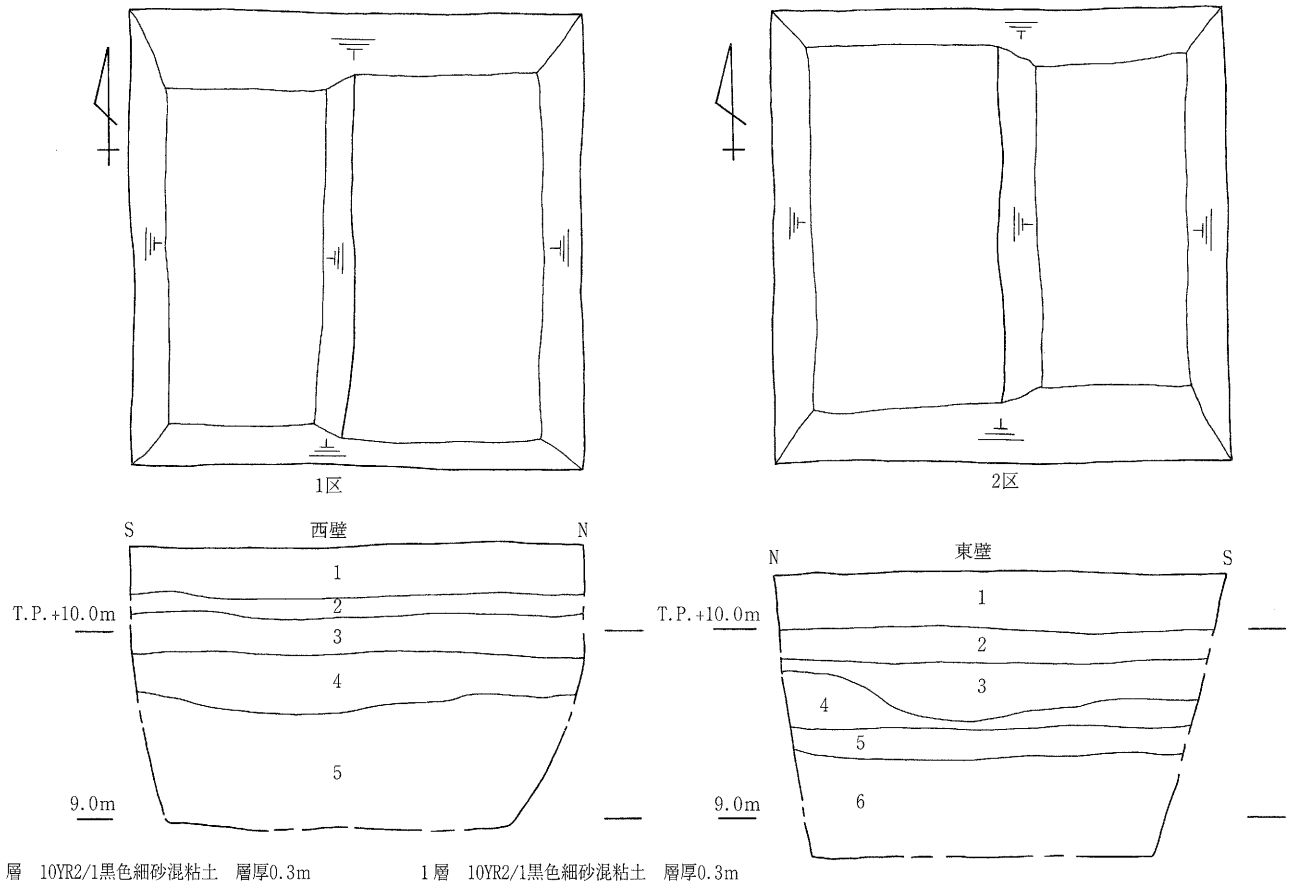
４層上面で調査を行ったが、遺構の検出はなかった。

５．出土遺物

１区の３層からは、奈良時代～平安時代ころの須恵器の杯蓋１、土師器の羽釜２、２区の３層からは、奈良時代～平安時代ころの土師器の皿３が出土した。１は天井部のつまみで、径2.6cmを測る。つまみの先端が欠けており、また、口縁部も欠損していることから、全容は不明である。内外面ともにナデ。２は、口縁部と体部を欠損している破片であるため、全容は不明である。鍔の径は27.2cmを測



第38図　出土遺物実測図（S＝1／4）



1層　10YR2/1黒色細砂混粘土　層厚0.3m
2層　10YR5/6黄褐色粗砂混粘土　層厚0.1m
3層　10YR6/1褐灰色粗砂混粘土　層厚0.2m
4層　10YR6/2灰黄褐色細砂混粘土　層厚0.3m
5層　10BG3/1暗青灰色細砂混シルト　層厚0.7m以上

1層　10YR2/1黒色細砂混粘土　層厚0.3m
2層　10YR6/2灰黄褐色細砂混粘土　層厚0.2m
3層　10YR5/2灰黄褐色細砂混粘土　層厚0.1～0.3m
4層　2.5YR3/1暗赤灰色細砂混粘土　層厚0.1～0.3m
5層　5YR4/1褐灰色粗砂混粘土　層厚0.1m
6層　2.5Y7/2灰黄色細砂混粗砂　層厚0.5m以上

0　1　2m

第39図　1区・2区平断面図（S＝1／40）

る。鍔の下側のほぼ全面には煤が付着している。内外面ともにナデ。3は口径16.0cmの皿で、内外面ナデている。

6．まとめ

今回の調査では、両調査区ともに3層内には奈良時代から平安時代頃の遺物を含んでいることが確認できた。この遺物包含層は、今回の調査地の南西側に近接している平成6年度市教委調査でも確認している（吉田野乃1995）。このことから、遺構の存在はなかったが、集落が存在していた可能性があると推測される。

（西村公助）

【参考文献】

成海佳子　1993年「XⅧ　東弓削遺跡（第6次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』　財団法人八尾市文化財調査研究会報告39

吉田野乃1995年「17.東弓削遺跡（94-484）の調査」　『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告31　平成6年度国庫補助事業

西村公助　1999年「21．東弓削遺跡第10次調査（HY98－10）」『平成10年度八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会

9．水越遺跡（２００１－９７）の調査

１．調査地：八尾市服部川３丁目77番１

２．調査期間：平成13年６月５日

３．調査方法

専用住宅建設に先立ち、敷地内の浄化槽設置予定個所に調査区を１箇所（２×３ｍ　面積６㎡）設定し、地表下2.3m前後まで重機と人力を併用して調査を行った。

４．調査概要

地層

１層　盛土　層厚1.3m。現地表面の標高はT.P.+21.7mを測る。

２層　10YR5/6　黄褐色細砂混粘土　層厚0.2m。

３層　10YR4/4　褐色粗砂混粘土　層厚0.2m。

４層　10YR3/3　暗褐色粗砂混粘質土　層厚0.3m。弥生時代の遺物を含む。

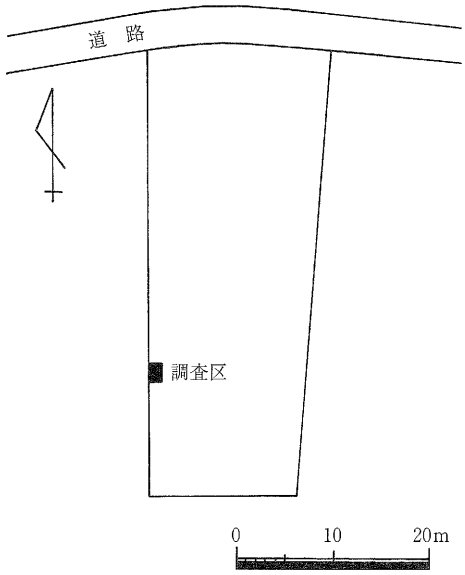
５層　7.5YR4/6　褐色細砂混粗砂　層厚0.4m以上

検出遺構

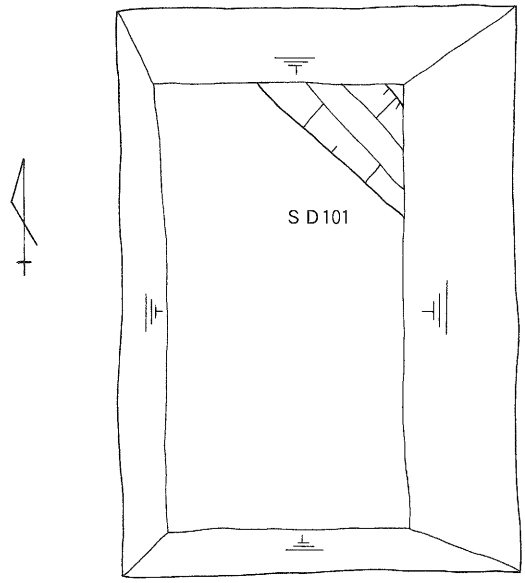
３層上面から切り込む溝１条（ＳＤ101）を検出した。この溝は南西～北東方向に伸びるもので、幅0.3m、深さ0.4mを測る。堆積土は、上からa　2.5Y5/4　黄褐色細砂混粘土、b　7.5YR6/1　褐灰色細砂とシルトのラミナで、遺物の出土はなかった。

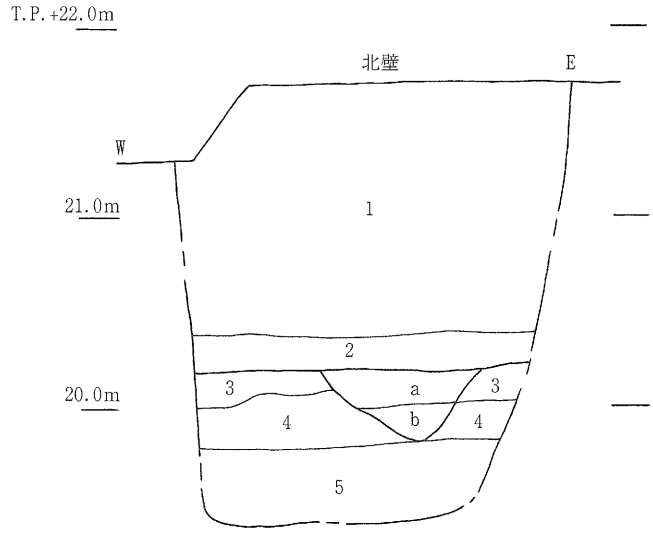
４層は弥生時代の遺物を含む地層である。この層の上面からの遺構の検出はなかった。

第40図　調査地周辺図（１／5000）



第41図　調査区設定図（S＝1／800）



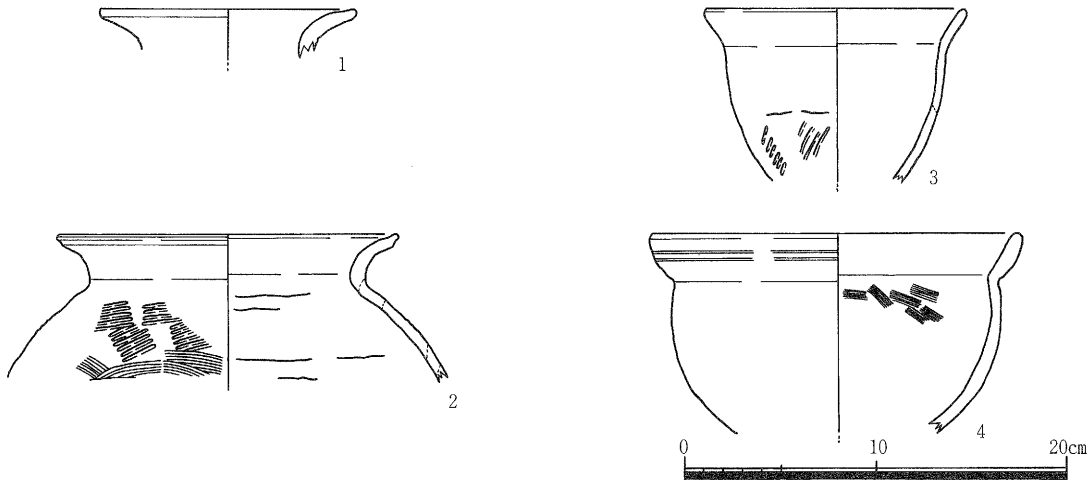


1層　盛土　層厚1.3m
2層　10YR5/6黄褐色細砂混粘土　層厚0.2m
3層　10YR4/4褐色粗砂混粘土　層厚0.2m
4層　10YR3/3暗褐色粗砂混粘質土　層厚0.3m
5層　7.5YR4/6褐色細砂混粗砂　層厚0.4m以上

a　2.5Y5/4黄褐色細砂混粘土
b　7.5YR6/1褐灰色細砂とシルトのラミナ

0　1m

第42図　平面図（S＝1／40）



第43図　出土遺物実測図（S＝1／4）

５．出土遺物

１区の４層からは弥生時代後期の壺１、甕２、鉢３・４が出土した。１は外反する口縁部。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ナデを施す。２はやや丸めの体部から外反する口縁部。口縁部端は凹線状にくぼむ。体部の外面は右上がりのタタキ目、内面はナデを施す。３は小型の鉢と思われる。体部外面下半はタタキ目、上半はナデ、内面はナデている。４の丸みのある体部から内湾ぎみに立ち上がる口縁部。口縁部外面は強いヨコナデにより凹線状に窪んでいる。体部の外面はナデ、内面はハケ目を施す。

６．まとめ

今回の調査では溝１条と遺物包含層（４層）を検出し、弥生時代後期の集落が存在していることが判明した。以前の調査（財団法人八尾市文化財調査研究会　第７次調査地）においても、弥生時代後期の遺構が検出されており、今回の調査地で検出した溝（ＳＤ101）はこれら遺構面の広がりの一端であると考えられる。

（西村公助）

【参考文献】

成海佳子　2001「Ⅱ　水越遺跡第７次調査（ＭＫ2000－７）」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告２』平成12年度　八尾市教育委員会　（財）八尾市文化財調査研究会

消斎　1997「水越遺跡（95－582）の調査」『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告36　平成８年度国庫補助事業　八尾市教育員会

図　　版

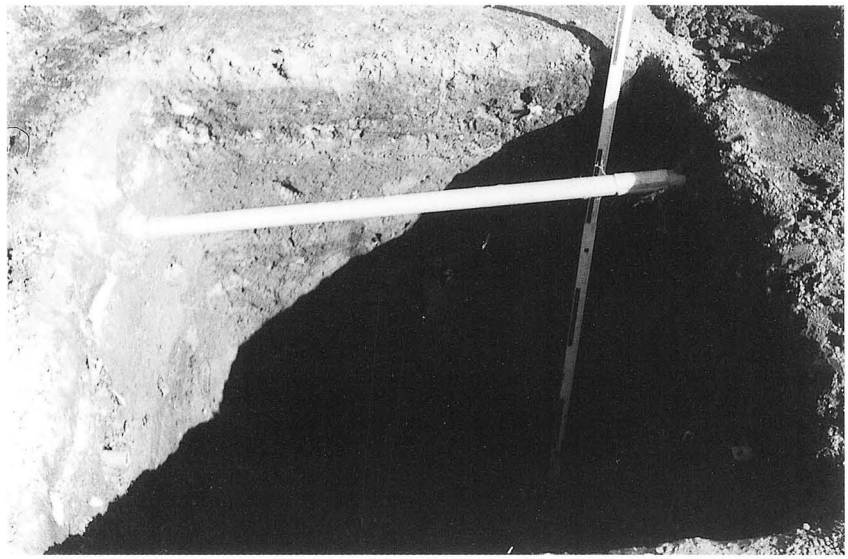
図版1　跡部遺跡（2000—435）の調査

調査地周辺（南西から）

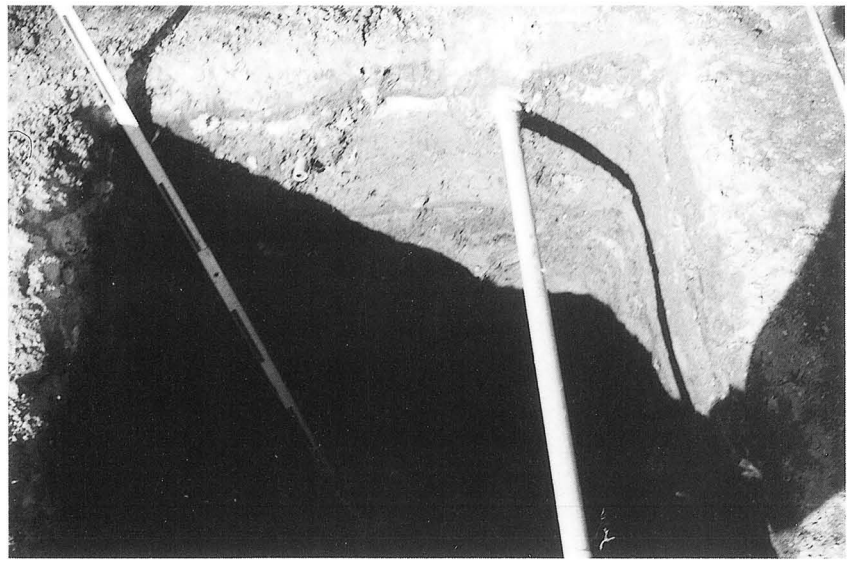
3区全景（南から）

3区東壁（西から）

調査地周辺（南西から）



全景（西から）



全景（南から）

図版3　郡川東塚古墳（2000—306）の調査①

調査前の状況（南側）

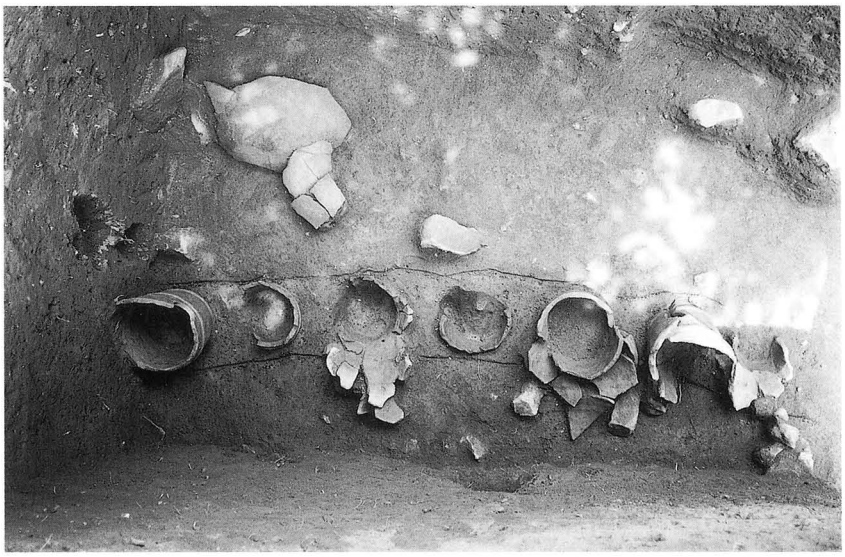
調査地設定状況

調査風景

図版4　郡川東塚古墳（2000—306）の調査②

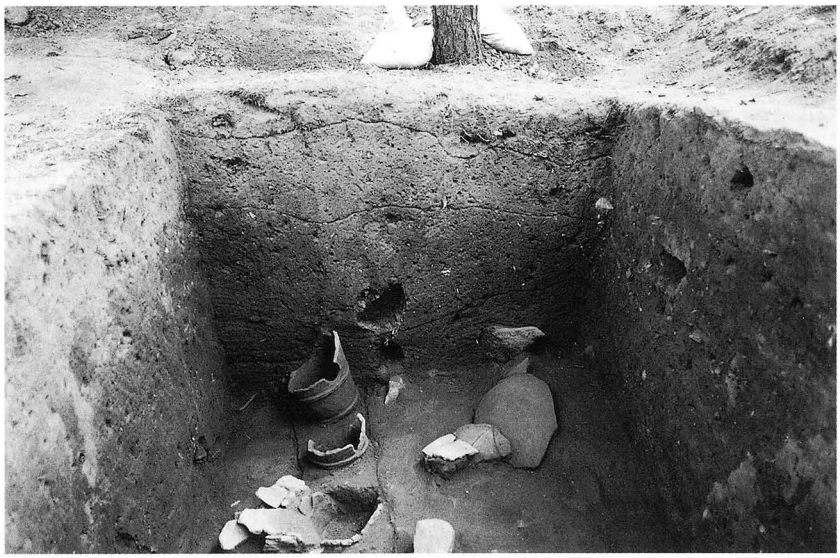
埴輪列調査風景

埴輪列検出状況①（北から）



埴輪列検出状況②（上から）

図版5　郡川東塚古墳（2000—306）の調査③



埴輪列検出状況③（北から）

埴輪列検出状況④（西から）

埴輪列検出状況⑤（東から）

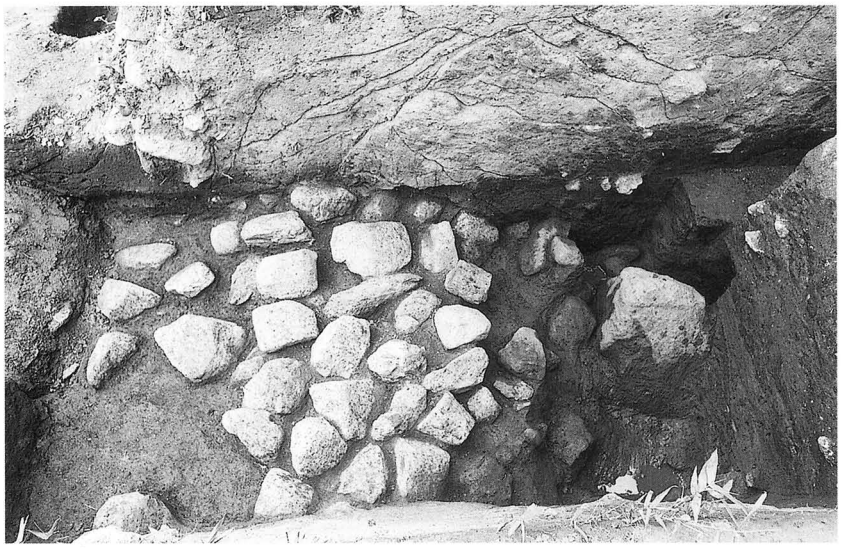
埴輪列検出状況⑥（西から）

第１区　葺石検出状況

第１区　墳丘面検出状況

図版7　郡川東塚古墳（2000—306）の調査⑤

第4区　基礎石検出状況



第3区　基礎石検出状況

第3区　基礎石下層検出状況

図版８　郡川東塚古墳（2000—306）の調査⑥

第３区　側石検出状況

側石近接①

側石近接②

図版9　郡川東塚古墳（2000—306）の調査⑦

石室調査風景

石室検出状況①（北から）

石室検出状況②（西から）

羨部付近検出状況（北から）

玄室付近検出状況（北から）

石室と墳丘面（西から）

調査地周辺（南東から）

1区　全景（南から）

2区　全景（南から）

調査状況（南東から）

1区　西壁（東から）

2区　東壁（西から）

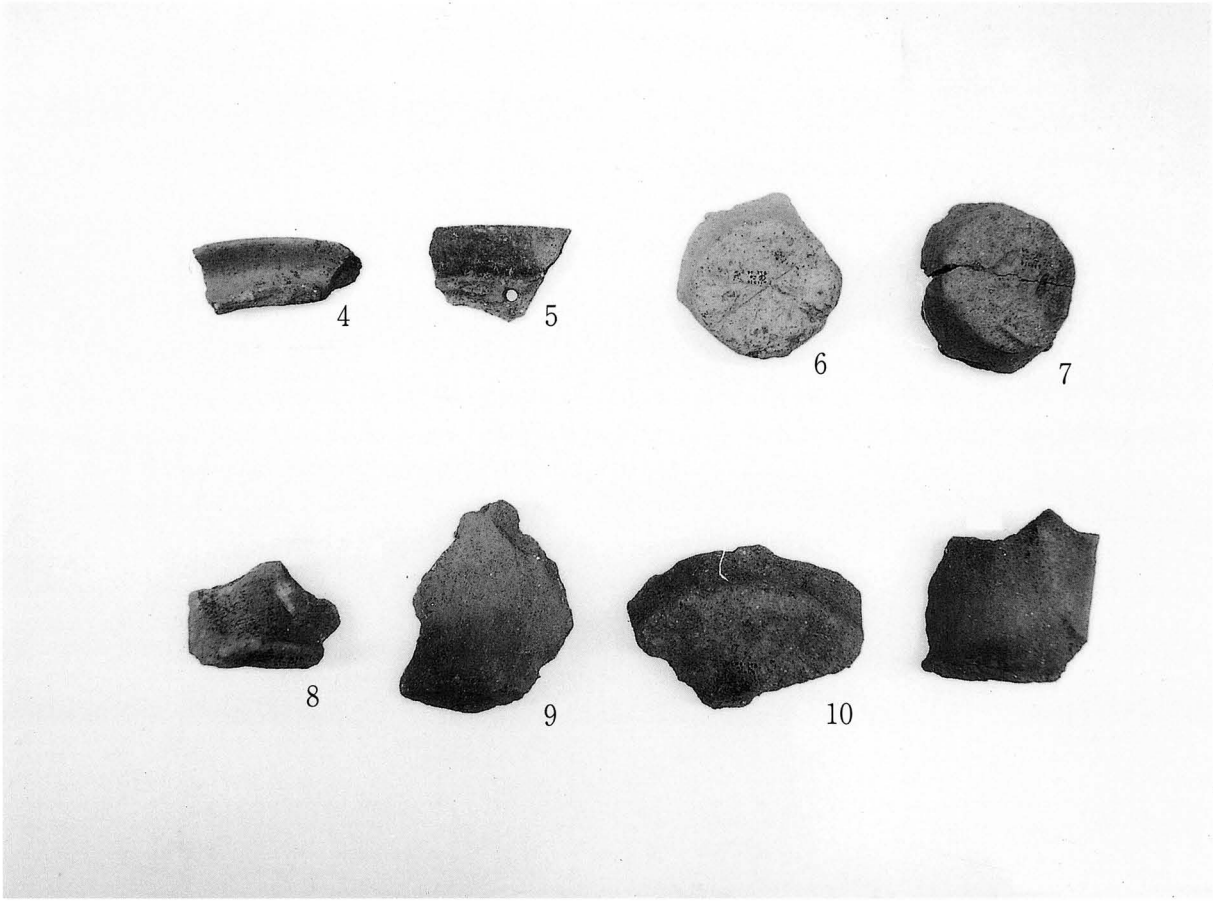
図版13　水越遺跡（2001—97）の調査

調査地周辺（西から）

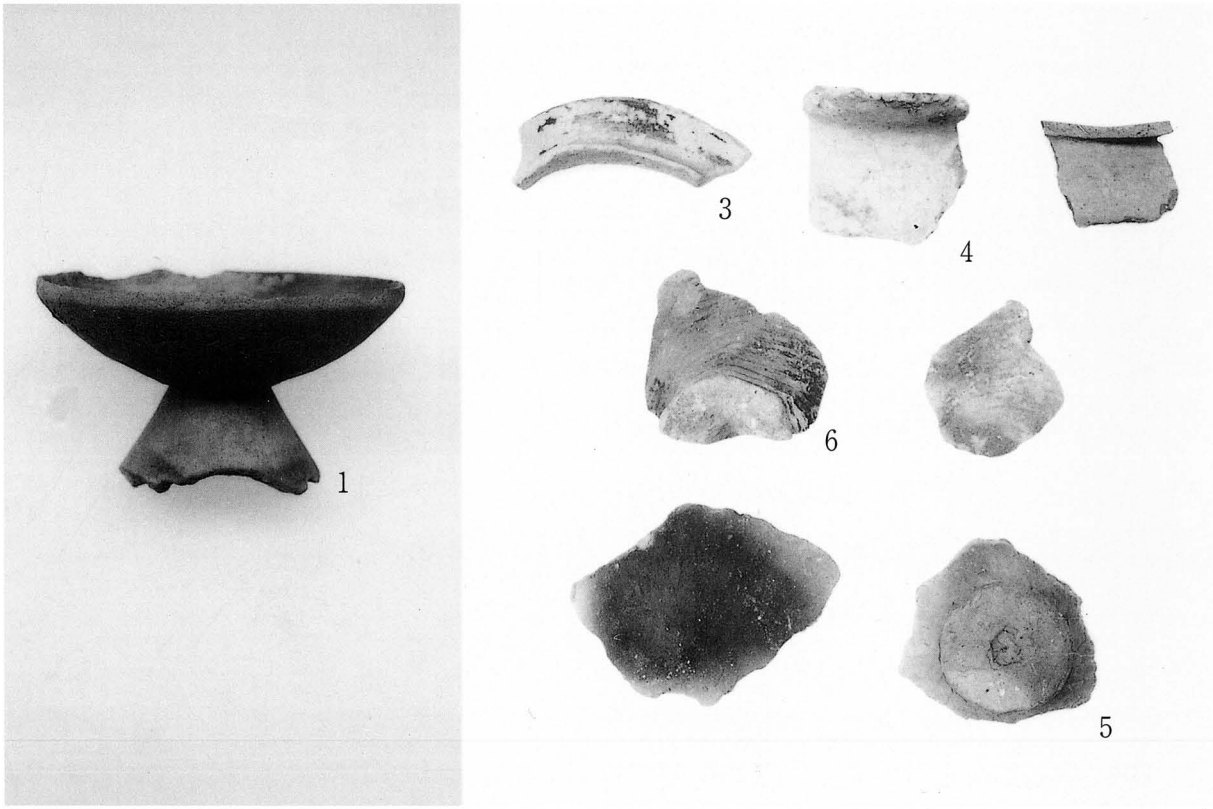
全景（南から）

東壁（西から）

図版14 恩智遺跡（2000—398）・久宝寺遺跡（2001—271）出土遺物



恩智遺跡（2000—398）



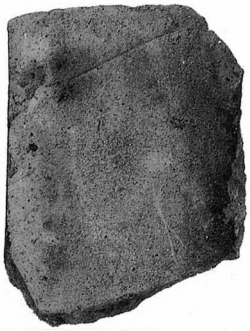
久宝寺遺跡（2001—271）

図版15　久宝寺寺内町遺跡（2001—193）出土遺物

2

3

1



4

図版16　郡川東塚古墳（2000—306）出土遺物①

1

2

3

4

5

6

図版17　郡川東塚古墳（2000—306）出土遺物②

7

8

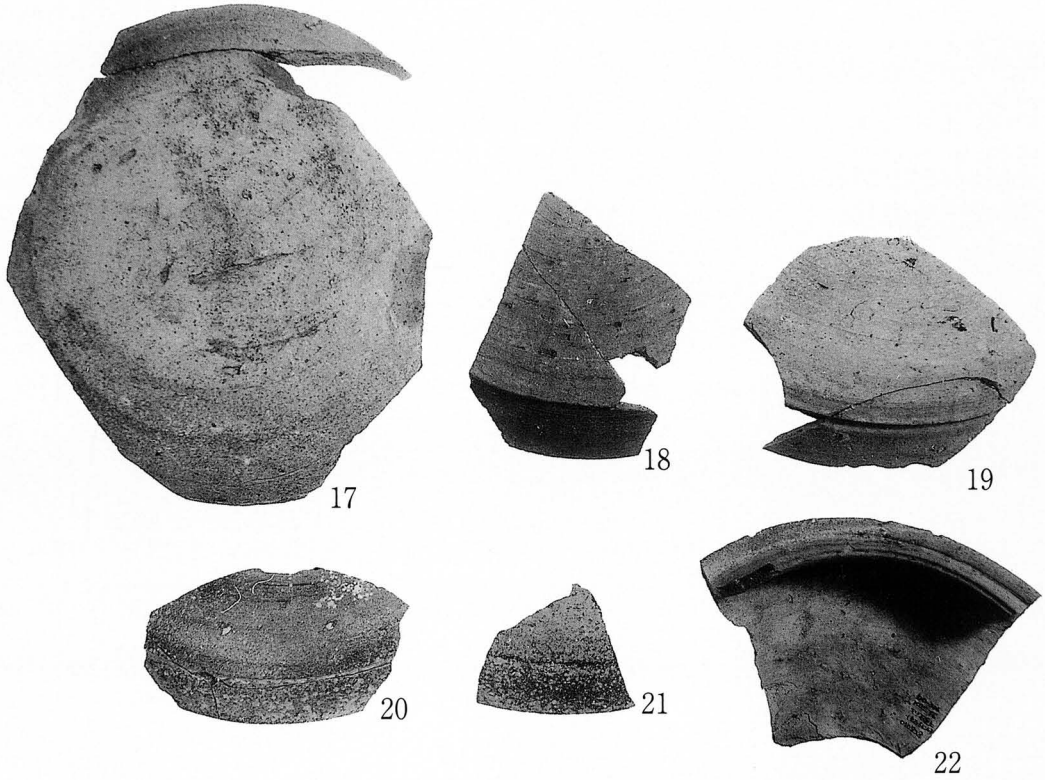
9

10

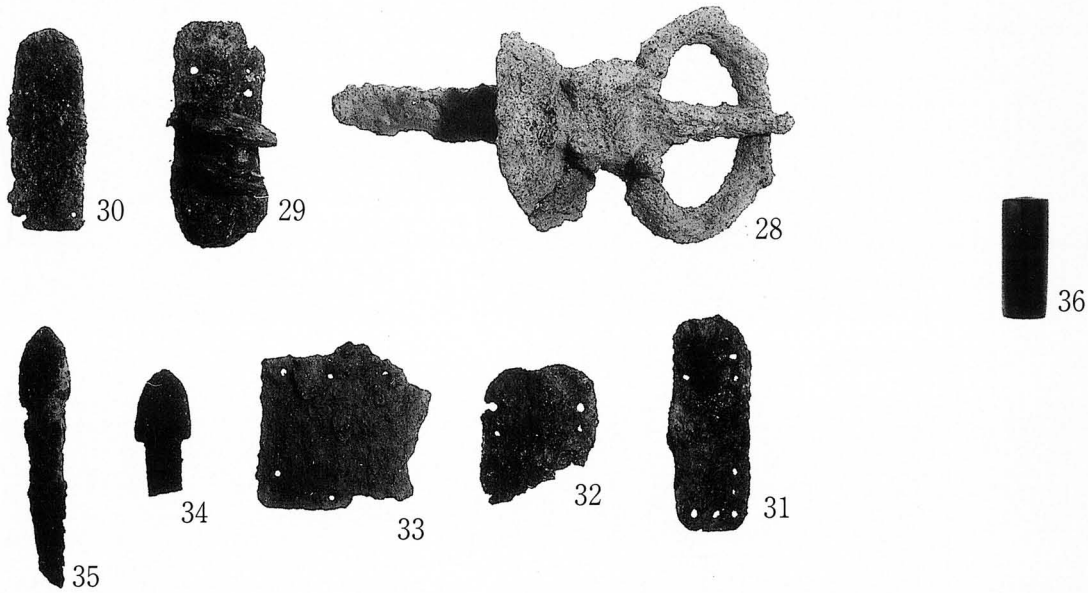
11

12

図版18　郡川東塚古墳（2000—306）出土遺物③

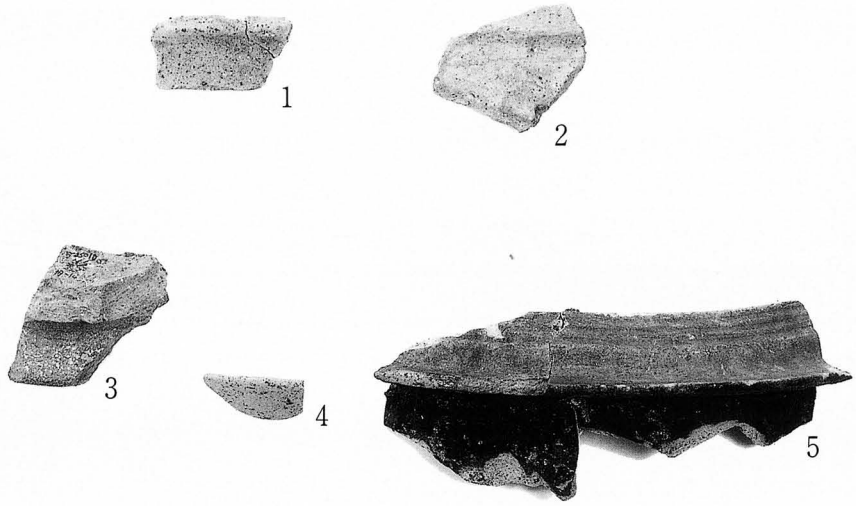


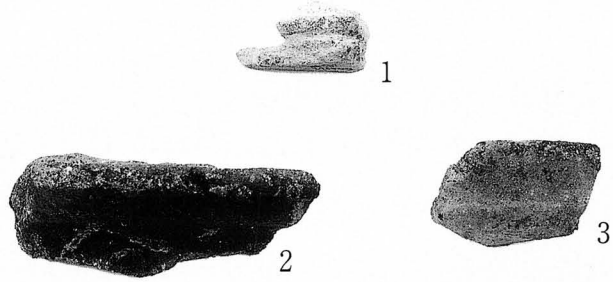
須恵器（17～22）

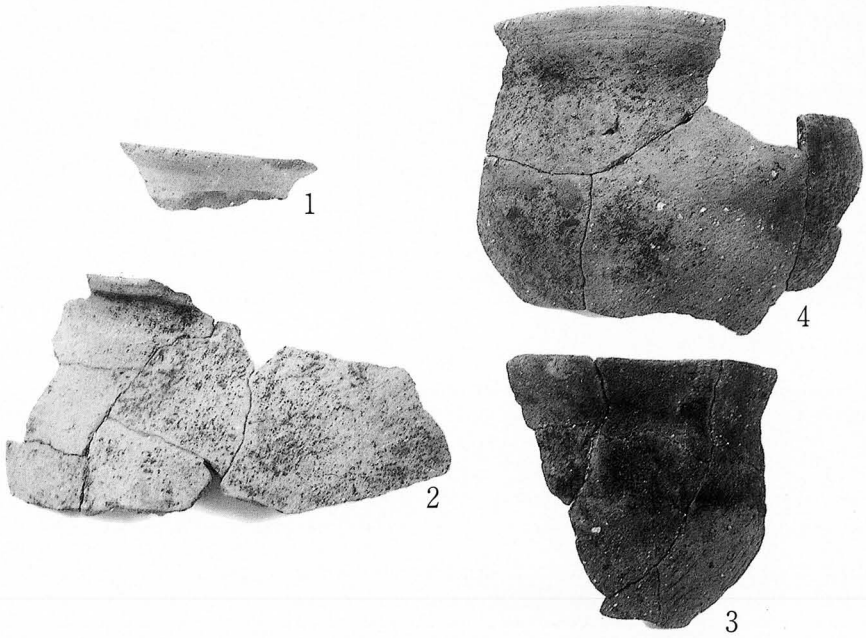


鉄器類（28～35）・管玉（36）

図版19　神宮寺遺跡（2001—64）・東弓削遺跡（2001—30）・水越遺跡（2001—97）出土遺物







報告書抄録

ふりがな	やおしないいせきへいせい13ねんどはっくつちょうさほうこくしょⅠ
書名	八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書Ⅰ
副書名	平成13年度国庫補助事業
巻次	
シリーズ名	八尾市文化財調査報告
シリーズ番号	46
編著者名	藤井淳弘・西村公助・吉田珠己
編集機関	八尾市教育委員会
所在地	〒581－0003　大阪府八尾市本町1丁目1番1号　☎0729－91－3881
発行年月日	西暦2002年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北線 °′″	東径 °′″	調査期間	調査面積（m²）	調査原因
跡部遺跡（あとべいせき）	八尾市春日町（やおしかすがちょう）	27212		34 36 50	135 35 39	20010315	18.00	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
恩智遺跡（おんぢいせき）	八尾市恩智中町（やおしおんぢなかまち）	27212		34 36 14	135 37 56	20010119	2.00	専用住宅建設に伴う遺構確認調査
久宝寺遺跡（きゅうほうじいせき）	八尾市久宝寺（やおしきゅうほうじ）	27212		34 37 37	135 35 14	20011019	27.00	倉庫建設に伴う遺構確認調査
久宝寺寺内町遺跡（きゅうほうじじないまちいせき）	八尾市久宝寺（やおしきゅうほうじ）	27212		34 37 28	135 35 24	20011120	1.00	車庫付倉庫建設に伴う遺構確認調査
郡川東塚古墳（こおりかわひがしづかこふん）	八尾市郡川（やおしこおりがわ）	27212		34 37 12	135 38 19	20010220～20011204	108.00	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
神宮寺遺跡（じんぐうじいせき）	八尾市神宮寺（やおしじんぐうじ）	27212		34 35 53	135 38 09	20010508	4.00	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
東郷遺跡（とうごういせき）	八尾市本町（やおしほんまち）	27212		34 37 33	135 36 09	20011218	6.25	専用住宅建設に伴う遺構確認調査
東弓削遺跡（ひがしゆげいせき）	八尾市八尾木（やおしやおぎ）	27212		34 36 24	135 37 05	20010509	11.52	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
水越遺跡（みずこしいせき）	八尾市服部川（やおしはっとりがわ）	27212		34 37 25	135 38 27	20010605	6.00	専用住宅建設に伴う遺構確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
跡部遺跡	集落	弥生時代～古墳時代	土坑	弥生土器	
恩智遺跡	集落	弥生時代～古墳時代	ピット	土師器 弥生土器 サヌカイト	
久宝寺遺跡	集落	弥生時代～古墳時代	落ち込み	土師器 弥生土器	
久宝寺寺内町遺跡	集落	近世	遺物包含層	陶器・瓦	
郡川東塚古墳	古墳	古墳時代	葺石・埴輪列・石室痕跡	埴輪・須恵器・土師器・鉄器	
神宮寺遺跡	集落	弥生時代～中世	遺物包含層	弥生土器 埴輪 土師器	
東郷遺跡	集落	近世	溝	瓦 陶器 瓦器	
東弓削遺跡	集落	奈良時代～平安時代	遺物包含層	須恵器 土師器	
水越遺跡	集落	弥生時代	溝	弥生土器	

八尾市文化財調査報告46
平成13年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書Ⅰ

発　行　日　2002年３月
編集・発行　八尾市教育委員会　文化財課
〒581-0003　八尾市本町１－１－１
TEL(0729)24－８５５５（直通）
印　　刷　(株)近畿印刷センター

＜八尾市刊行物番号H13－84＞